
女王の惑星（ほし）

現王園レイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女王の惑星^{ほし}

【Nコード】

N2397I

【作者名】

現王園レイ

【あらすじ】

■改稿連載中 ■ 銀河系外縁星域のアツペリウ星系の人類は、実に人口の4分の3もの人間が何らかの遺伝子疾患を持つと言われる。▼「思い出を探している……」空色の少女との出会いは、少年を奇妙な災禍へと巻き込むことになるが、まさかそれがアツペリウ星系の秘密を暴くことになるとは思ってもよらない。▼彼らと運命に影差す『バトリク』とは何なのか、ベールが剥がされていくスペース・ファンタジー。▼いつか誰かと結んだ『約束』を、彼らは守れるのか。少年は彼女との約束に応えられるのか。

001 ノスタルジアへの風

——それは、郷愁の過去も憧憬の未来も、ノスタルジア。

—— 日常に埋もれている、の「埋もれて」とは、あまり適切な言葉では無いように思う。

むしろ偏光グラスの中に透明化しているのではないかと、目を凝らしたくなるのだ。

それはほんの少し角度を変えるだけで良い。擬態しているだけだから。

普遍的な事由なのか、自然の摂理なのか、私はこちらの道を歩いているし、あなたは向こうの道を走っている。

足元の空気、石ころ、雑草、虫たち。鳥は羽ばたいて、四つ足は駆ける。

全身の五感を剥き出しにして、自分は自分が思うままに歩いていると考える。

その時点で、あなたは己の自由に理由を付けて満足する。

歩けば渦巻く空気が風になる。

風が記憶を運んでくる。

人は風が内包する何千、何万もの匂いを脳裡に留め、ふとした事で鮮やかに思い出を手に取り出すのだ。

それら個々の意識が集合され、幾世代も蓄積されて、こんにちの人の世があるのには否定の余地などない。

何故ならば、たった今のあなたが、その上に生きていることに他ならないからだ。

—— そう

—— だから、私は

——私は、こんなにもあなたの傍にいたいのに……

■銀河宇宙外縁星域・アッペリウ星系第二惑星『ヤノ』。

——「今度はいつ帰るの」

まるで雑踏と化しているホワイトタワー・ステーションで、少年はいつものように同じ事を訊く。

「さて……何事も無ければ、いつも通りだ、叶^{かなう}」

大きくてゴツい手が少年の肩に置かれ、そして彼から手荷物を受け取った。

「また荷物の行き違いが起こらないといいね、父さん」

白くて並びの良い歯を覗かせて笑った。

苦笑を返しながら父は手を振って背中を見せ、ゲートの奥へと遠ざかっていく。

この遣り取りは、全くもっていつものことである。

やがて後姿が見えなくなると、叶^{かなう}少年はステーションの外に出るべくその方向へと足を踏み出した。

むやみにだだっ広く、むやみに天井高い館内で、アナウンスがよく響く。

『ヤノ発、第五惑星直行便のシャトル294は、間もなく^{カタバルトデッキ}射出台の上へ移動します……』

カウントダウンの近い旨がアナウンスされた。

叶^{かなう}は急ぎ足だったのをとと早めて走り出し、今にも扉を閉めそうになっていた磁気浮上列車に飛び込む^{マグレフ}。

「間に合うかな……間に合え」

誰も座っていない席を探すと、大きく開口している窓際に身を寄せて見上げた。

磁気浮上列車は、そんなに急ごうというスピードじゃないほどに、実にスマートにレールの上を滑って巨大なタワー・ステーションを抜け出る。

その外はすぐ海だ。

水面から十メートルほどの高さを真っ直ぐ、四十キロほど先の陸まで海鳥には目もくれず、白い光の筋のよう水平に移動する。

下に見える海は藍の色を為しているから、水深は相当なものだと窺えた。

その海に、ホワイトタワー・ステーションも銀色の体を深く潜り込ませて建っているために、一見、絶海の孤島である。

深青の水面に映った影を歪ませながら走っている間に、叶かなうの瞳はステーションを飛び立つ四角いシャトルを捉えていた。

離陸時の高周波音は聞こえないが、充分視覚的には満足できるものであった。

本当の事を言えばステーションよりも、その遙か上空にある宇宙港に巨大船がドッキングしたり、出航したりするのを双眼鏡で見るのが好きなのだが、それでもまだこの惑星を離れて宇宙に行った経験が無い彼には、胸踊る光景である。

レール途中にある海底行きの駅にも停まらず、ステーションとは対照的に平たく低い階層構造である陸の駅に到着した。

ここで叶かなうは降りてタウンへと向かう。

「少し……痺れる気がするけど……」

人が行き交う中で、指先を擦るように手を合わせた。

黒っぽくて中途半端な長さの髪の毛が頬をくすぐる。

「やっぱ帰る」

何処かへ道草をしに行こうと考えていたが、指先で体調を読んだかそれは諦め、すぐにタクシープールに行つて、自宅住所コードを

打ち込む。

平たい陸の駅からは幾筋もの道路が扇状にそれぞれのタウンへと延びていて、その中の一本を叶かなうは走っていた。

強い日差しの時間はとうに過ぎ、影を少しづつ伸ばし始めている。巨大な尖塔が立ち並ぶタウンの一角で走る速度を落としたかと思うと、タクシーはそのまま一つの建物の中に入って行き、建物中心を貫いている空間を上へと上昇、地上数十メートルの所で停まった。『精算はご自宅のチェックで承ります』

カートの端末ターミナルが義務的に訊いてきたが、これもいつもの事だったからOKの手を振って下車し、そのまま自宅のドアを開いて勢いよく帰宅した。

「あ……母さん、戻ってたんだ」

丁度一人の女性が、たった今帰ってきたと言わんばかりの格好で部屋に立っていて、振り向きざまに言う。

「お帰り叶かなう。お父さんは行ったの？」

「うん。見送ってすぐに帰ってきた」

「そう、お前も行きたいでしょうけど……」

その言葉に叶かなうはちよつと諦めた表情で首を横に傾げる。

「いや……別に構わないよ。今日もなんか具合がよくないし」

母親は心配そうな顔で自分と同じくらいの背丈の息子を見つめた。

「このあいだ診てもらったばかりだけど、また病院行く？ 第二段階ワクチンの時期も、もういいでしょうし」

「その方がいいかなあ」

「もう十六だし、ワクチンの申請を出せるように直ぐ診てもらおう。でないと宇宙にも行けないものね。父さんみたいに他所へ行っ働ききたいならね」

控えめにしても健康優良児に見えない、線の細い体の叶かなうの頭を片手で抱え、頬を寄せた。

少年はまた、指先にピリピリした痺れを感じていた。

夕食は母の手作りである。と言うかいつも殆どが手作りなのだが、

体力の劣る少年の為を思つて、食事の材料にも調理にも人一倍気を遣う。父も息子の為に大農場を経営する会社に転職した。

叶^{かなう}の病状は生まれる前から発症しており、長ずるにつれて丈夫になるとか治るとかいう楽観的なものではなかった。

難産、死産ならばまだ思い切った覚悟も踏ん切りもつこうが、無事に生まれてしまうのだから始末が悪く、完治も無理だと言われている絶望的な病の治療は、少なくとも現状よりマシになるように特殊なワクチンを胎児のうちに投与するしか方法が無い。

それもまた一時凌ぎに過ぎず、成長の段階を追って一生のあいだに数回、人によっては数十回も打たれる。そのワクチンがあれば生き延びられるし、一種の強壮剤的仕様で体力も付き宇宙にだって行けるのだ。

そのように根本治療ができずに対症療法を行いながら、原因は随分と長いあいだ不明とされている。

そして患者も異常に多い。

かなう

叶たちが住む惑星『ヤノ』には十五億ほどの人口があつて、その四分の三もの人間に、ワクチンを必要とするなんらかの基礎疾患が見られるのだ。

これがこの星系の惑星全土に散らばっている人間ならば、一体どれほどの罹患率だというのか皆目見当もつかない。

かなう

叶の両親は共に二回づつで済んだと言う。

「僕は……どれくらい持つんだろ……」

いつも抱く微かな不安を胸に、超高層住宅タワーの一角から下界を見下ろしつつ食事を口に運んだ。

「あまり思い詰めないのよ。体は心が病めば、一緒に病んでしまうから」

母親がその年齢と病気の狭間で揺れる、一人息子の心理を諭す。

「ワクチンを打って上々なら、今度家族で宇宙旅行しようと思ってるのよ。どう？ 楽しみにならない？」

そう言い終えるより、息子の瞳が大きく開くのが先だった。

「それ、かなり期待していい？ 絶対だよ？」

「勿論。お父さんとも話しはしてあるの。明日の予約が取れるか確認するから……取れたら病院に行きなさい。診断の段階で副作用の可能性が出たなら、入院の準備も必要だしね」

「わかった。入院にならなきゃいいけど、予約は午前中だよ？ 午後は熱が出そうだからね？」

叶は嬉しさを満面に、食事を終えた席を立つ。

薬を飲むのよ、と背中を追いかける母の声を受けながら、大きな双眼鏡を設置してあるバルコニーに出た。

夕食時には薄暗く、紫色の空気が都市全体を覆いつくそうとしていたのに、もう海と同じ藍色の空が緞帳のごとく降りている。この時はせつかくの夕焼けを見損なっただなんて残念な気分になった。

行けるんだ——！

少しは格好つけて平静さを装っていたつもりだったが、親の口から具体的に宇宙旅行の話が出ると、思ったより心躍る自分が少し面映かった。

宇宙と言っても惑星間旅行だから、あまり大きな船ではないかもしれないけれどね、と更に母が告げる。

分かってるって。

紅潮した頬を見られないように、愛用の双眼鏡に飛びつく。

いつも眺めているタワー・ステーションより高く、成層圏の空港よりもっと上に行ける。

惑星間旅行とか、そんな近場でなんて思われそうだけど、何パーセクも飛ぶような恒星間旅行は無理なんだし、まずは僕が住んでいるこの惑星『β ヤノ』を上から見下ろしてみたい。

そんな想いをあれやこれやと遠く上空へ馳せるのに夢中で、双眼鏡を覗き込んでいるにも拘らず、何も見ていない自分に気がついた。

（あつ……と……落ち着け……）

傍らの椅子を引っ張ってきて座り込むと、双眼鏡の映像をモニターに映るよう切り替えて、簡単なプログラムを打ち込む。

そうすると双眼鏡が勝手にズームしたり、好きなところを向いたりするのだが、今夜は宇宙旅行の話で興奮したせいか、カメラモーターの双眼鏡がガクツと下を向いてしまった。

「指が滑ったよ……」

言い訳のように独り言をして、早々に道具を仕舞いこむと寝る準備を始めたのである。

「気をつけるのよ。食事は無理しないで家事ヘルプを頼んであるから。でなければお祖母ちゃんちにお世話になりなさい」

叶が病院へ行こうとしたとき、母親も出かける準備をしていたのかなうで、そう言えば彼女も出張で居なくなるんだと思ひ出す。

両親不在で得る自由を期待しつつ、生返事でジャケットを着込んだ。

「薬も、だよな」

「当たり前じゃない。忘れないの」

高層タワーの居住区画で、二人は玄関の前ですぐに分かれた。

母はタクシーに乗り込み、叶は高速エレベーターで地上に降りる。かなう

海風に顔を撫でられながら、予約のとれた時間に遅れないよう急ぎ足で向かう。

さして暑くもない気温でじつとりと汗がにじむような肌触り。今日の風は湿気を含んで少し強引だった。低気圧が近いのだったろうか。

都市はシールドを張るからあまり気にはならないが、それでも海が近く波も高いならば用心せねばなるまい。

もう少し快適なつもりで徒歩を選んだのに、叶は僅かに予定を狂わされた。

それでも十六と言う齡は無敵である。大きな通りを一本隔てた隣のタウンには、ほんの二十分くらいで着いた。

殆どが白い建物で構成されている都市で、辿り着いた病院は僅かにグレーの色を為している。街中と変わまちなからずこった返しているのを尻目に、掛かりつけの医師の病棟へと向かった。

「——痺れの度合いは」

「前よりも強くなった気がするんですが、体温も下がってきてるの
で少し動くのが辛いです」

「そうか……代謝酵素が減ってきている典型的な例だな。しかし診
断しやすい病状でよかった」

「今日は薬になるんですか、ワクチンですか」

診察と言うよりも定期的な病状の報告に近い。

^{かなう}叶の疾患は医師の表情からしても、そう重くも無く緊急性も要し
ないのが見て取れる。半ばホッとはしたが、昨夜からの逸る心が医
師を急かしそうになった。

「ワクチンは血液検査をしてからになるので、今日ではないよ。君
の”型”が判り次第連絡するから」

そう言つてカルテに打ち込む。

控えていたアンドロイドが、叶の耳たぶから痛みも無く血液を採
取した。

「ワクチンって何処で作ってるんですか？」

何しろアッペリウ星系の、全人口の四分の三が罹患している病気
だ。相当量のワクチンが何処で作られているのか、透明な絆創膏を
貼られた耳たぶを気にしながら訊ねると、医師は叶の顔も見ないで
答えた。

「……さあ、何処かの工場だというのは聞いているけれどね、ただ
患者さんからのデータを受付窓口に送信するだけなんだよね。……
それと、ワクチンを打つ前には数日間、強めの薬を飲むからね」
少年はそうですか、と呟くように言うとジャケットを手にとって
診察室を出た。

血液検査により叶の体質が判明するのは直ぐだが、工場で生成す
るのに時間が掛かるという。

個体差に対応のためと、時に失敗もあるために数本のワクチンを
用意するのだ。

（通過儀礼ではあるけれど……一回で済めばいいな……）

堪え性の無い年齢なので仕方が無い。溜息をつきたくなくなるような気分でエレヴェータを降りた。

用がすんだら、グズグズせずに病院は直ぐに出る。

来た時と同様に足取りは軽やかであった。

学校は休んでいるため自宅学習だから、今日の予定は特に無い。

湿気を持つて滲みたそんな太陽を見上げながら、今日はどうやって時間を潰そうか考え、階段に差し掛かったときである。

降るそうとした叶の足が、宙空に不自然に止まった。

その視界に入る人影。

特に何の疑念も持たない日常的な光景ではあるが、ふと目を引く一瞬の邂逅。

二、三人で立って話をしてるのもあれば、通信機で誰かと話しこんでいる人もいて、散歩の途中のように腰を下ろしている人もいる。優雅に弧を描くスロープは、ベビーカーを押した女性が昇ってきていた。

だから、それが何だと言うんだ。

釘付けになりたい視線を無理矢理に解ほどこうとして、叶は足を置く。蒸し暑さを孕んだ風が横から吹き込み、その後姿は、風を抑えようとして片手を挙げ、優雅に指先に髪を絡めた。

横顔がその影に見えて、叶は再び四段ほど降りたところで止まった。

黙ったままでいれば、その固まった視線に誰だつて気がつくだろう。

相手は少年の瞳を見つめ笑う。

まだ季節的に強い日差しの下、クールな空色アスールの髪と同じ色の瞳は少し違和感があった。

「———こんにちは」

叶よりも年下に見える少女が声をかけてくる。彼女の後姿から挨拶までも何ら予期していない彼は、心臓の鼓動を早めることすら忘れて、「どうも」と義務的に返すしか手段が無かった。

それから、自分が彼女の座っている所まで二段ぐらいしかなかったことに気がつく。

あつと言う間に乾いた口の中に、定型句を押し出してみた。

「病院、終わったんですか」

少女は何も答えずニコニコしている。

「あ……すいません、変なこと聞いて」

どうして自分が恐縮しなければならいいのか理解できなかったが、撮り合えず彼女の隣まで段を降りてみた。

「別に……変じゃないわ」

見た目と同様に涼しい響きの声が叶を見上げる視線の下から出た。「病院に來たわけじゃないけど、此処は色々と問題抱えてる人たちが集まるところだから」

見た目年齢の割りに、ませた口を利くんだなと思う。

たぶん、僕よりも三つくらい？ いや、五つくらいは下に見えるんだけど。

「そういう人たちを眺めて？」

「眺めてるっていうか……でも私には何もできやしないんだけどね」
腰まである長い髪を揺らして階段の下方に目を向けた。

「——あなたも病気？」

「うん……」

「そう」

「君は？」

「特に無いわ」

なんだか不思議な沈黙が二人のあいだに流れたが、彼女がふいに立って「わたし、キアラ」と叶と同じくらいの高さで名前を云うので、慌てて叶も自分の名前を名乗る。

「わたし、この街のことよく知らないの」

ひらりと叶より一段上に飛び乗った。

「よく知らないって」

「……だいぶ昔も来たような気がするんだけど、あまりに久しぶり

で記憶が曖昧。だから目に付いた此処に来てみたの」

「小さいときに来たことがある？」

「……そうね……小さいときもあったわ」

やけに意味深だとは思ったが、そこを深く考えることは無い。

この不思議少女なら、何を言ってもファンタジーで済みそうだったからだ。

「思い出を探しに歩いてみようとしたけど、ちょっとこれじゃ行方不明になりそう。色々街も変わるでしょう？　ほんの散歩なのにリセットした方がいいかな」

大きなお世話にならなければいいが、何となく叶のなかに親切心が起きてしまった。

「僕はこの辺に住んでるから、少しは案内できると思うよ。良かったら手伝おうか」

「手伝ってもらえるの？」

キアラの白い顔が、血の気が通ったように明るさを増したので、自分が調子に乗ってしまった微かな後悔は、心の隅に追いやった。

「いいよ、完璧にはいかないときは……^{かなう}……なんだけど」

言い終わるか終わらないうちに、叶の左腕がキアラの手に掴まれて階段を引きずられるように下り始めたので、慌てて体勢を整えた。

突然の出会いで、叶^{かなう}は少女キアラとタウンを観光モードで歩くことにはなったのだが、彼女は公共の交通機関や、支払い用クレジットの使い方が分からないために、慣れないエスコートをする羽目になっていた。

おまけに自分のIDカードも無いと言うので、カードを必要とするところには行けない。

社会的ルールも経済システムも一切無関係な環境で育ったのだから、普通の大人ならば非常識と眉をしかめ、俗世と乖離しているような、そんな少女と歩くのには確かに骨は折れる。しかし、思うほど負担となっていないのは彼が「少年」だからとも言える。

今はそれを目一杯、脇目もふらずに楽しむのだ。

少しづつ歩きたいと言うキアラの要望に、タウンを路面電車^{トラム}などで一気に回るのは止めた。

「……あのさ」

「なあに」

「君……」

会ってから気になってはいたが、本人の意向だと思って訊けずにしたのだが、さすがに街の中では足元の危険も考えざるを得ない。

「あの、キアラは靴履いてないけど」

「そうね」

簡単に認めた。

「なんか履かなくても？」

キアラは今更のように自分の足元を見つめて、呟く。

「裸足……じゃないほうがいいのかな」

「そりゃ……足を怪我しないようにとか」

彼女の裸足の理由について何とかフォローを入れようとしたが、うまく思いつかなかったのでありきたりな『足の保護』しか言えなかった。それが自分で少しもどかしい。

「叶は、靴履いたほうがいいと思うの？」
かなう

「できれば……」

——じゃあ、履かせて。

無抵抗にさせられそうな響きのある声で、キアラはねだった。

ショッピングモールは近かったから、徒歩で靴のショッピングを探す。通りすぎる人たちは、別段、裸足の少女など気にする風もない。それがまた靴が本当に必要なのかどうか迷う錯覚に陥る。

「どういうのが好きなのか分からないし、自分で選べるよね」

女の子が来そうな靴屋があったので、その前で彼女を促すと、

「じゃあ、アレがいいわ」

即断即決。早々にショーウィンドウに陳列されていた靴を指し、店員を呼んで取ってもらうと無造作に足をつ込んだ。

「似合うかな」

透き通りそうな髪色と瞳と、膝丈の白いコットン・ワンピースを着た足元に、真っ赤な靴を装って立った。薄空色と、白と、真紅のコントラストが眩しい。
アスール

「似合うって言われても……」

キアラは笑った。

「叶がよく分からないなら、私も分からない。でもコレが好き」

「キアラが良いのなら、構わないよ」

少年と少女の、羽根触れ合うような会話が彼らの世界を象つてい
かたどる。

叶の小遣いで支払われた新しい靴は、以前から彼女は最初からそうだったように自然に履きこなしていた。

病院の周囲は広大な森林公園になっていて、その結構な距離をずっとタウンの方向に歩いてきたのにも関わらず、足を怪我した風もない。

街には似合わないと言うか自然すぎる子なんであり、よほど隔離されたような世界で育った気もするけれど、この惑星にはそんなにド田舎になりそうな場所が思い当たらないし、考え付かなくてもどこか僕とは全く関係のない世界からきたんだ。

叶の持てる知識で想像出来る少女の生活環境は、そのへんが限界のようである。

「よく歩くね」

「いつも歩いてるせいかしら、平気なの。叶は疲れた？」

「大丈夫だけど……なにか分かりそうなところ、あるかな」

体の奥底が疲れを訴えていたが、病院でいつもより強い薬を服用したため、今すぐ座り込みたい衝動は無い。ここは女の子の手前、少しは見栄を張ってみる。

「……あまり分らない……ここじゃないかも知れない」

少し瞳が翳った。

思い出探しが容易ではないのは、今更の話である。

しかし昼食の時間がとうに過ぎていたのが気になり、キアラをフードコートに誘いひとまず空腹を満たすことにした。タウンに数あるタワーと同様に外観が真っ白な色をしたショッピングモールで、屋外のフードコートは床を石畳にしたどこかの古い町並みの雰囲気を出している。

そこにまた白い大きなパラソルと白いテーブルと椅子といった具合に、そんな装いは軽くりゾート気分になれた。

昼食を終えた客と入れ替わりに、アフタヌーンティーを楽しむ人々が寛いでその場の空気を楽しむ。ゆっくりとしたその午後、急ぎ足の海風でさえ躊躇うように間を縫って通り過ぎた。

叶は育ち盛りの少年らしく、まだ時間的に間に合ったボリウムのあるランチセットを頼んだ。

内容はどうしても病気に見合ったものだが、彼のような人間が多いのでそれ向けのメニューは充実している。

隣に座ったキアラの前には、水と果物のシャーベットだけがあつ

た。

「それで間に合うんだ」

「いつもこんな感じよ。今日は、あまりいい果物が無さそうだったから、暑いし、シャーベット」

自分で選べる食材が並ぶカウンターで、しっかりと素材を見切っている。

「そんな冷たいの、今は食べられないから羨ましいなあ」

「美味しいのに。なぜ？」

「僕は、病気だから体を冷やすものを食べると、体温下がって大変になるんだよ」

「——病気」

「こんどワクチン打つから、丈夫になったら食べられると思うけど」
「そうなんだ」

「知らない？ 似たような病気の人はこの星にも、星系にもいっぱいいるんだ。でも直ぐに治るみたいだから」

少し考え込むように叶の言葉を聞いていたキアラだったが、ひと掬いすくのシャーベットを口に運んで、その冷たさを愉しむように味わった。そして、

「その病気って、どうしてそんなに大勢の人たちが罹ってるのかしら」

何気なくごく普通に聞いてきたのだろうが、そんな疑念すら人々には思いつかないほど当たり前の現象になっている。

「なんて言うか、“風邪”くらいにしか考えてないのって、どうなんだろ」

「風邪もこじらせれば致命的なのよね。同じく致命的にもなりかねないその病気、皆が患っていればごく普通のことなのね」

「そうなんだよ。僕は体温の低下とか末梢神経の障害くらいで済んでるし、両親も二度くらいのワクチンで完治してるから同じに考えていいのかなって」

「……そう考えても別にいいのだけれど……叶はこの病気の原因つ

て聞いたことは？」

簡単にモノを言いすぎたかなとは思ったが、キアラが別の方向から訊ねてきたので、「そんな話は誰からも何処からも聞こえたことは無い」と答えた。

それには彼女が、そうよね知らないの、と呟いたのは叶にも聞いて取れた。

“あなたたちは”——と。

日暮れは半日のデートが終わる事を告げた。

キアラの思い出は見つける事ができず、また明日ね、と言うことで続行が決まる。

「いいけど、君に連絡とか出来ないの？」

「色々、用事が」

もじもじする彼女の様子から、それはそれで忙しい人なのだとも取れた。

「明日の……明日も午後には病院の階段じゃダメ？ 待ち合わせ」

叶が頷くと、ありがとうと言ってあっさり小走りに去っていく。

赤い靴だけがやけに視界の残像になった。

「……時間、聞いてないんだけど……」

すっかり忘れていたそれは、今日の反省点である。

キアラとは反対の方向に家路を辿り、そして本日の思い出探検ルートを顧みながら、明日はどこを回ろうかと翌日のスケジュールを組み立てた。

車で少し遠出してみようか——

でもゆっくり確かめたいって言ってたしな——

夕暮れの、空気が薄い紫を帯びた灰色になった時間。オレンジの街灯を始めに、様々な色が都市を大げさに飾り立てようという別世界への入り口である。

フウと摩天楼を見上げるように首を巡らしたとき、「いいかな」と声が掛かった。

間違いなく自分に向けた声だったので、恐る恐る振り返ってみると警官が立っている。

「身分証を確認したいのだが」

「あ、はい」

目の前を塞ぐグレーの制服に緊張しながらポケットからIDカードを取り出し、警官が掌大の端末に差し込んで内容を確認した。

このような光景は珍しいことではない。この惑星だって理想の天国のように治安が完璧なワケでもなく、法を犯すものと、法の執行者がいるだけなのだ。

「今日はどちらにいらっしゃったのです」

「午前中に病院に行っていました。そのあとは友達と買い物に行つて制帽の下から警官が職業に準じた目で叶かなうをジロつと見る。

「買い物は何を？」

「……靴を買つて、プレゼントしました」

なるほど、と独り言をしながら、警官は端末からIDカードを引き抜いて叶に返す。

「失礼ながら病歴も確認させていただきました。どうぞお大事に」敬礼しながら彼のそばを離れ、流れる人の群れの中を一つ頭ほど高い背丈の警官は、近くの中空で待機していた警察ロボットに端末を差し込んで格納すると並んで歩く。

ロボットは円筒形の頭部分にあるカメラを回転させながら、警官と共にIDの確認を続けていた。

街角の情報スクリーンが、天気予報でハリケーンの注意報を出していた。今日の蒸し暑さはこの熱帯性ハリケーンのせいだと言う。

夜になると昼の地表熱もあいまって生温さを増していた。

明日は晴れるのだろうか。

翌日、「午後」と漠然とした時間帯でしか約束できてなかったの
で、叶は昼食もそこそこ家に飛び出して病院の階段に立っていた。
末広がりの幅広い階段は、今日も色んな人々が行き交う。脇のス
ロープにはひっきりなしにエア・モーターが滑り込んでいた。

今日も昨日並みに蒸し暑さが続いている。

日差しが強く感じられたので、病院の玄関付近の影に退避して待
つこと数時間。

「……来ないな……」

忘れられてしまった気がして寂しくなる。

（やっぱりなんか、不思議な子だったし……）

そう言い訳もしたくなるのも無理はない。

昨晩は星空も見ないで、派遣されてきた家事ロボットの食事もち
やんと食べたし、友達の悪戯な通信も相手にしなかった。思いは複
雑である。

もう五分、あと十分、或いはこの数字が並んだら。

そう自分に言い聞かせて随分経った。それでも玄関から下に見え
る階段に、彼女の姿は無い。

「——帰ろうか」

誰に言うでもなく腰を上げ、気持ち重くなった足取りで降りてい
く。

日はいつものように傾くだけである。

「——」

高台の病院下に広がる公園の木立の間から、何かが耳元をくすぐ
る。

「——かな、う」

ハツとその方向を見ると、昨日と同じ格好で赤い靴を履いた少女の姿があった。

キアラ、と名前を呼びそうになって、彼女が人差し指を口の前に立てているのに自分を押し留め、何となく周囲を見回してから走り寄る。

「遅くなってごめんなさい」

昨日のふんわりとしたファンタスティックな雰囲気は何処へか、とても申し訳無さそうに謝ってきた。

「いや、時間決めてなかったし……もう少しで帰っちゃうところだったけど」

言いかけてキアラの息が少し上がってるのに気がつく。

「急いだ？」

「ちよつとだけ」

「休んでから行こうよ。まだ時間あるから」

叶としては精一杯の気遣いではあるが、キアラはその一言で秋眉を開いた。

「休まなくても、いい」

「いこうよ。」

グツと掴んできた手には強い意思が込められていて、叶は昨日初めて会ったときも同じ感覚だったのを思い出す。

「今日は別のところを歩こうと思うんだけど、良かったら車で少し遠いところはどうかな」

「叶が連れて行ってくれるなら、行く」
かなう

「でも時間遅くなってるのは大丈夫？ その……一応キアラの都合もあると思うし……」

知り合ったばかりで彼女との時間の過ごし方も気にかかるが、彼女はそれも構わないと言う。

「わたしは門限無いの。気にしないで」

その割りに昨日は走って居なくなったくせに、キアラの物言いは僅かに落ち着きを失っていて、どこか圧されるような雰囲気にな

以上は時間について口にできなかった。

じゃあこっちにね、とエア・モーターの市内循環車シティー・カープールを目指す。

乗ったのは交通システム内に沿って自律走行する車だが、自分でも運転できる仕様にもなっていて、システム外でも乗用できる二人乗りの浮揚する小さなモーターカーであった。

「運転、大丈夫？」

「そこそこ上手だとは思う。好きだから結構乗ってるよ」

自尊心が傷つきそうな事を聞かれて、叶としては多少の反発心も起きてもいいのだが、どうも素直な家庭で素直に育ってしまうと人の好きが前面に出てしまうのだらう。キアラも嫌味のない聞き方をするので、すんなりと受けれるのである。

スロープを昇ってタウン内に張り巡らされているハイウェイに入する。

ハイウェイのすぐ脇を並走しているレールを、磁気浮上列車マグレフがあとと言う間に追い抜いていった。

「あの乗り物は、速いね」

「キアラは乗ったことが無い？」

「無いわ。こういうエア・モーターも初めて。……外って楽しいね」

「ホントに何にも知らないんだね」半ばあきれたように感心する。

「まるで何処かの別の世界の人みたいだ」

アッペリウ星系のみならず、人類は宇宙のほうぼうに進出している。だからどんな人が居ても不思議ではないけれど、もしかしたらキアラのようなタイプが珍しいのかもしれない。

「そう思う？ 私もそう考えてる」

「ここの惑星じゃないんだ？」

「……この星にはずっと居るわ。もうずっとね……」

その瞬間だけだったろうか、彼女がとても遠い人のように感じたのは。

昨日みたいなお喋りが出来ないストレスが、叶の上に押し掛かつ

た。

「ずっと居るのに、簡単に思い出が探せないんだ」

「——私も、なにか変な病気なのかしら」

道路を覆うように立っている天候シールド・バーが急に数を増してきた。海が近いのだ。

「病氣つて、昨日は何も無いって言ってたじゃん」

「自分ではそう思ってたけれど」

「キアラは記憶障害でも起こしてるのかもしれないよ。治療とか考えてみた？」

「私、医者なら回りにいっぱい居るの」

「——え？　じゃあ君は病院抜け出してきたんじゃ」

「病院じゃない……と思うんだ」

「ええー、なんだか凄そうな人とお友達になっただってこと？」

車内のコンソールに格納していたハンドルを引き出しながら、叶は興奮してきた。

海の上を渡つてすぐのタウンに下りる準備である。

「別に、そんなに凄くないわよ」

悪戯っぽく笑った空色の瞳は、彼よりも三つは下だろうと思った年齢よりもずっと年上の女性のようだった。

ちよつとドギマギして、慌ててモニターで行き先を確認し今日の予定を告げる。

「こっちのタウンは博物館とかのアカデミックなトコだから、資料として記憶の補完ができるかもしれないよ」

「いまいち自信はない。でも何かあると言うならば此処は最強だろう。」

「ただ博物館と言っても……色んなジャンルがあるから、入り口で総合案内を見てからにしようかなって」

キアラはコクンと頷いた。

天気情報が伝えるよりも穏やかな海面上のハイウェイを通り過ぎ、
叶が住んでいるタウンよりも圧倒的に自然が生い茂っている島へと
辿り着く。

ハイウェイを降りると多少入り組んだ道を手動運転で博物館に向
かい、木陰にエア・モーターを停める。IDカードを引き抜いて下
車すると自動的にロックされた。

巨大な四角い箱が芸術的な風体で何個か積まれたような形の博物
館は、いくつかのジャンルやテーマに沿って展示が分かれている。

斜面に建造されているため、三階部分に当たるところに入り口が
あった。

暗めの玄関を入ってすぐ、館内の案内ディスプレイで品定めをす
る。

「民俗とか宇宙開発とか、普通の歴史展示もあるよ。——こっち
は美術館っぽいなあ」

「ここ、今日じゃ全部見れなさそう」

「軽く一巡できそうなコース設定、考えてみるよ。待ってて」

大きなディスプレイの脇にずらりと並んだ端末の一つで、叶は博
物館の目玉展示室のピックアップを始める。

ここで設定した情報を貸し出される眼鏡にインストールすると、
館内のコースが資料と共に表示されて簡単に回れるのである。

端末のお薦めメニューに、幾つか適当に選んだ展示室メニューを
突っ込むと、眼鏡の準備中の文字が点滅し始めたところで、ちょっ
と手間取ったかもしれない気がした。

何か、少しの時間も惜しいのである。

キアラの姿を探すと、彼女は広い玄関ホールの一隅にあるテーブ
ル状の台の上に映し出されていた、アッペリウ星系のホログラムを
見つめていた。

「——何してるの、キアラ」

ずっとそこで凝視しているせいか、彼女の体までが硬直したよう
に感じられる。

「あ……」

叶。

微かに名前を呼んで、ホログラムを指差した。

「これは——この星たちは、全部なの？」

叶たちが居る『第二惑星 β ヤノ』を入れて、このアツペリウ星系には七個の惑星が恒星を回っており、第一惑星以外は植民星と化しているが、他星系とでも商業取引を始めとする交流はある。

てつきり衛星の数でも合わないのかと思って「この星って惑星のこと？」と訊ねた。

「そうよ、惑星は七個なの？」

「増えたとも減ったとも聞いて無いし、博物館も最新の情報でもって展示してるだろうから、間違いはないと思うけど」

ホログラムの光を受けて青白いキアラの顔を覗き込む。

「わたしの勘違いなのかしら……」

考え込むような表情をしたあとに、彼女はテーブルを離れて叶を促したので、持っていた眼鏡^{グラス}を手渡した。

「このプログラムどおりに館内を回るけど、眼鏡の画面の隅に矢印が表示されるからね、迷わないで済むよ」

叶の嗜好で周回プログラムを組んだので、最初に入るところは宇宙関連の展示室である。

主に開発事業に関する場所ではあるが、広大な宇宙地図が広い壁面一杯に展開されて、薄暗い室内はまるでプラネタリウムのようにあつた。

「宇宙旅行にようこそ——」

意気揚々と、まるで本当に宇宙に行く気分で足を踏み入れた——と、首の後ろに激しい衝撃を受けたと思ったら、その瞬間に叶の意識は闇の底に転落していったのである。

「ひっ……」

と言う、キアラの小さな悲鳴を聞きながら。

脳震盪のうしんたうのような具合の悪さを感じて瞼を開いた所は、明らかに博物館の展示室よりも狭くて密度の高い人間の臭いがした。

「……ッ」

声を出そうとしたら口が開かない事に気がつく。

何故だろうと身を起こせば、今度は手足が思うように動かない。ボンヤリとした頭は、時間と共に状況の整合性を増して行く。

口は猿轡。

足首と手首は拘束。

最悪なことに視界は目隠し。

「——！」

これは尋常ではない事態である。
「叶かなう」

少し離れた所からキアラの焦った声がした。

だからと言って、彼の心細さの支えにはなりそうになかった。

「叶、大丈夫ね、叶、ごめんなさい」

彼女が謝る理由が分からない。

それよりここは何処で、僕はどうしたんだと、口をモゴモゴさせる。

男がキアラを嗜めた。

「お静かになさってください」

野太く、低く、丁寧だが有無を“言わせたくないのだ”と言う声だった。

「……お黙りなさい、ジョット軍曹。彼をこうする必要があったのですか」

澄んだ声に怒気が籠っている。

「貴女が浅はかなのです。勝手に出て歩くからです」

「彼は関係ないでしょう」

「貴女と接触したのが原因ですよ、キアラ様」

「何も知らないのよ」

「御自分の立場をお考え下さい」

「立場って……あなたたちが勝手に決めたんじゃないの。今こんなこと言っただけで始まらないけど、今まででもずっと言ってきたわよね？」

どうしようもない格好で、叶は男とキアラの会話を聞いていた。
（キアラは、どこかの重要人物で一般人とはかけ離れた処にいたんだ……）

自分が遇した事態の割にあまり危機感が無い。

少女が自分には身近な存在ではなかった事に多少の失望感があつたが、今はそれよりも、ちよつと痛い拘束具を取って欲しかった。

「彼と話がしたいわ。あれを外して」

「……構いませんが、無駄なお喋りは不要ですよ」

ガツンと冷たく固い床に踵が落とされた音がして、寝転がされていた葉が椅子に座る体勢に直された。ベンチのような台の上に横たえていたのである。

後頭部のパチンと言うベルトの金具が外れる音と共に、塞がれていた口が解放されたところで、苦しいわけではないが口で深呼吸を三回する。

「……僕は」

「本当にごめんなさい。何も知らないのに、こんなことになって——お詫びのしようが無いわ……」

元気の無いキアラの声が間近で聴こえて、手の甲に体温を感じる。

「キアラ……君は大丈夫なんだ？」

「私は平気。痛かったら怒っていいわ。私が悪いんだもの……」

「と言うか、正直な話、何が起こったのかサッパリ分からなくて。

でも——詳しい話って、ダメっぽい……よね」

知覚できる僅かな情報からでも、この場の雰囲気は掴み取れる。まして、こんなピリピリと全身に針が刺さりそうな空気の中だ。軍曹と呼んだ名前からして、軍が関与している少女。

彼女の自由意志で外界を出歩くのは叶わないこと。

この振動と揺れからして、自分は何かの乗り物に乗っている。そして、何処へ連れて行かれるかは不明。

（不味いことに首を突っ込んでしまったんだろうか……）

どう見ても大ごとなのではあるか、まだ叶にはピンと来ない。そしてキアラの思い出探しとは、そういうことだったのかと多少の符合を得た気になる。

「そうね……詳しい話は……」

「キアラ様」

叶に答えようとした言葉は遮られた。

「ジョット、別に難しい話をするわけじゃないのよ、邪魔をしないで」

「民間人を巻き込んでしまった始末は貴女に付けられるのですか」

「あなた達のやってることに比べたら、私は可愛いものじゃない。

それとも——」

「キアラ様が居なければ我々は確かに困りますが、これは既に慣例化しているも同然なのです。どうぞ心をお静かに」

「私は……私は別に困りやしないのに——」

急に彼女のトーンが下がった。

またも存在感を失った叶が聞くその会話により、彼の中ではキアラの重要人物度がよりレベルアップされたのである。

だが、これはまだ内輪もめに過ぎない。

「あの……」

遠慮がちに口を差し挟んだのは、彼らの間の勢いある流れに逆らわないようにしてのことだ。

「キアラを責めないで下さい。僕もすっかりしてた事だし……その、僕は無事に家に帰れるんです？」

ジョット軍曹と思しき人物が答える。

「身体検査が必要だから、身柄の解放はまだだ。一緒に施設に行ってもらおう」

抵抗する気もないが、充分に抵抗力を失わせる圧感があった。

どうしようもない。

今夜は家に帰れないんだな……

「だから、彼は何でもないので」

食い下がろうとするキアラを、軍曹は一喝する。

「いい加減になさってください！ アナタは、自覚がなさ過ぎる！」
体も大きく揺れたのだろう、ガチャガチャと重々しい金属のぶつかる音がする。

「度が過ぎるようであれば、貴女も彼のようにせねばなりません。
出たいならば我々に申し付ければそれで良いのです」

少し気が付いた事がある。

本当に気のせいかもしれないのだが、キアラは叶に申し訳ないといいつつも、外界へ出ることに執着しているのだ。いつでも出れる立場なら、こっそりと出て歩くことなど必要ないはずであるのに、なぜ、彼女はそうしてまで出たいのだろうか。

よほど、彼女自身に大事な——そう、思い出とやらが——何か事件が起きているかも知れないのに。

こんなにもキアラが不自由な理由とはなんなのか……

一所懸命に頭を巡らす、知り合つて二日目、しかもこんな現実
に直面すると、想像をはるかに超えた事態には対応できない。

戸惑いの中で精一杯考えているうちに、叶は自分の体に変調が出
ていたのを感じ取った。

(……まずい……)

体の奥から、それは沈黙したまま蠢いていた。

(こんな時間帯になるとは思わなかった……)

昨日から強めの薬を飲んでいるので、反動も激しいのだろう。
己の体温が下がっていくのが分かる。体の芯に潜んでいた冷たい

モンスターが外へ外へと広がり、手足には痺れが発生していた。

（予備も持ってきて無いし……、だいたい、この状態でどうやって）
いろんな意味で冷や汗がどつと出てくる。

背中が段々と丸くなっていく異常な様子に、キアラが気がついた。

「叶、どこか具合が悪いの」

隣に座って背中をさすってくれる。

誰も味方が居ない中では嫌いじゃない行為だ。しかし、

「……あ……薬……」

——僕は、病気だったんだ。

そんな現実もあることに気がついた。

——なんだか、ここ二日間はみんな幻のようにも思えるんだけど。

「薬って、何を飲んでるの？ 携帯してないの？」

叶の異変に、ジョットが誰かを呼んだらしい。ドアが開く音がして人が入ってくると、手足の拘束具を外して横たえた。

目隠しだけは取ってくれなかった。

医師が居るというのも、なんだか良くできた話だ。

「IDはありますか」

「此処に」

ジョットが差し出したカードを端末に入れてスキャンした。ピピ

ピと言う音で、叶の個人情報が出てくる。

「カルテ欄には数日後にワクチンの予定がある。代謝酵素強化剤を飲み始めたばかりですね。まだ安定してないのに、服用の時間を空け過ぎた症状と診れます」

「デジレ、叶を助けて」

「どういうわけですか、このような患者が——ほんとに」脈を測って首で体温を確認した。「緊急事態ですが、いま手元に強化剤並みの薬が無いのです」

「どうなるの！」

「キアラ様、仮死状態に入れられるなら良いのですが、それを保証する道具もありません。このままだと体温が2時間以内に三十度を切

って重度の低体温になってしまいます。施設まで戻れば何とか軽い症状のまま処置できます。予断を許さない状態ではありますが……」手足の末梢神経の痺れに我慢している叶だったが、デジレの説明を聞いて覚悟を決めるしかないかと諦めかけた。

「じゃあ早く研究棟に行って頂戴。でも猶予がない場合に備えて、今やる方法はないの？ 何かやる事は？」

キアラの声が焦っている。

でも、もしも間に合わないなら。

そんなに死ぬことが怖いとは思ってないよ……

常に死と隣り合わせという現実が顕在化する。

「——方法がありますが、我々の世代では実施したことがあります。せん。それに、彼の型に合うかどうか」

「教えて！ 私に出来るのなら、私がやるから」

「もしかしたら彼を殺してしまうことになりかねません。キアラ様のお願いでもこれは無理ですよ」

「でも助かることもあるなら、やってもいいでしょ？ 過去にさんざんやってるなら、データベースで症例を確認するのに、見て！ こうしてるうちに叶が」

ヒステリックに叫んだかと思うと、バタバタと何かをしている音と声、それから専門的な用語が飛び交ったかと思うと、叶の上着の袖が捲り上げられて冷たく尖ったものが皮膚に触れる。

「——！」

それは薄い表皮を貫通して腕の中に刺さる針の感触だった。

何も、考える暇など無かった。

冗談じゃない。

いくら医師プロがいて、キアラだったとしても、そんな注射。

得体の知れない物質が叶かなうの体中を駆け巡る映像が、一瞬だけでも脳裏に浮かぶ。が、あまりにおぞましいので考えるのをやめる。

目隠しが効率よく彼を恐怖に陥れた。

「……何を……」

やったんだ、とうわ言のように呟くと、叶の手を握ってキアラが囁いた。

「不安？ 不安よね。でも安心して。これは血清みたいなものだから、あなたは助かるの」

「血清って——？」

彼の質問を遮るように、キアラは続ける。

「首に鎮静剤を打ち込むわ。あなたは暫く眠る。ちゃんと設備の整ったところへ行って……私がずっと付いてる」

終わるか終わらないうちに、頸動脈に冷たい何かが押し付けられて、空気の抜けるような間抜けた音がする。

「そばにね……」

約束、と言う言葉を聴きながら叶は意識が遠くなる。

まったく、今日は何度目だろう、こうして前後不覚になってしまふのは。

きっと夢も見ないで、目が覚めることがあれば現実に絶望してしまいそうなの……いや、たぶんみんな冗談で済むんだ。

少女からこの注射までまったく理解できないことだらけの中、辛うじて意識して自我を保てるのはこの病気のお陰だったかもしれない。此処まできたらパニックに陥っても良かったが、そうなる前に、

体の重みさえ無くなる世界へと落ちていったのであった。

叶を載せて走る軍用のボックス・トラックは、そんなに広くもない車内でも部屋と通路に別れていて、その一角に叶とキアラ、ジョット軍曹が三人詰め込まれていた。

武装を顕わにした小さめの車両が数台、トラックを前後に挟むよう配置され、少しの誤差もないほどの正確さで、つかず離れず滑っていく。

彼らが走行する道路はタウンを外れていつしか専用道路になり、小高い丘の影へと滑り込んでいった。

昼のエネルギーと夜のエネルギーが入り混じる混沌とした時間帯が、人の視界を惑わすように悪くする。

それすらも充分でない風に人目を避け、ダークカーキの建物の前でトラックはようやく停まった。

ジョットが車体脇の扉をスライドさせると、キアラに手を差し出した。

「キアラ様。貴女には大人しく部屋に戻っていただきます」

その命令口調に体を強張らせる。

「ダメよ。部屋には戻らないわ。叶のそばに居るのが約束なのよ。そう言っただから」

「彼は集中治療室に入ります。傍には居られませんから、あなたでは何の力にもなりません。それに――」

デジレが、叶を運び出す担架に手を掛けながら、二人の会話を遮った。

「貴女の体も休めなくてはならんでしょう。病気のようなものから」

「……！ 病気なんかじゃないわ。少し疲れるようなことになっただけでしょ……」

兵士が乗り込んできて担架をトラックから下ろすと、叶が目覚

まってしまうかと思うほど揺れた。

「——モニターで見れるようにしましょう。それなら我慢できますか」

「デジレ。モニター越しが約束を守ることになるのかしら？ 馬鹿げたことを言わないで。ジョット軍曹、私の要望はなぜ通らないの」
「キアラ様は、何もしてはならないのです。ですが——デジレ先生、治療後であれば面会を可能に出来るかダニロバ大尉に確認するので、その方向でお願いしたい」

「構いませんよ。許可を貰ってくださいれば、私はいつでも。……それじゃキアラ様、彼が落ち着いたら貴女の“診察”も」

デジレもトラックを降りると、叶が運び込まれた施設内へと入っていった。

続いてキアラとジョットの二人、トラックを出たが数人の兵士に囲まれて叶たちとは別の方向に歩く。

「……」

眉根を寄せて、叶の行った方向を二回ほど振り返った。名残惜しそうに、だがそれ以上に悲しさと、もう一つの感情を宿らせて。

——何をするにも障壁が立ちほだかる。

キアラは恐らく、自分の雁字搦めで不自由な身分に今更気が付いたというのだろうか。

この物々しい軍事施設の一角に閉じ込められた、高貴な虜囚——
薄暗い空気の中で、キアラの薄空色の髪が光を纏ったように見え、
同じ色の瞳も僅かな光を反射し、まるで水晶の泉の底から拾い上げたような色彩を放っていた。

見た目の可憐な少女とは正反対の、妖しい魅力を秘めた冷たい女王のような風格すら感じるし、何が彼女の中にそのようなギャップを生じさせているのか、謎めいた泉は深淵の様相を呈している。

彼女の意見は何ら通ることも無く非情なまでの強制によって、一行は敷地に建つ幾つかの施設のうち、二階建ての低い建物に入った。厳重なセキュリティを数回潜り抜けるうちに、彼女を取巻いてい

た兵士の数が減っていく。

最終的にはまたジョット軍曹と二人きりになるのだが、大量の監視カメラが備え付けられた廊下の手前に来ると、ジョットはそこで立ち止まった。

「——キアラ様。デジレ先生が診察に来るまでお休み下さい」
お目付け役の彼ですら、入れるのはそこまでなのである。

アンドロイドと警備員が居るゲートは、少女が入るに不似合いな厳しさで作られていた。

不機嫌に歪んだ唇のままジョットを見やり、それからゲートを潜ると二人の女が立って待つ。

「お帰りなさいませ、キアラ様。体を冷やさないように浴室の用意をしています」

「デジレ先生からはご連絡を戴いております」

深々と頭を下げて少女を迎える光景は、ますますキアラの奇妙な身分を錯覚させた。

二人の間を黙って通り過ぎると、女たちは彼女の後ろを歩いていく。

その姿を確認すると、ジョットは警備員の肩を叩いて囁くのである。

「屋外のサイボーグ犬は増やしてあるが、今後、同じ事態が起こっても怪我をしないように気をつけてくれ」

それから、警備隊長は何処かね、と訊ねた。

——煌々とした青白い光で満たされる集中治療室。

そこに移送された叶は鎮痛剤で昏々と眠っている。

注射された液体が何なのか、見た限りではなんの変化も見られないが、体内では想像を絶するようなことが起きているかもしれない。うっかり変な生体反応が出たら大ごとである。

普通ならば他の医師に任せてキアラの元へ向かうところだが、滅多にない症例でもあるので、そういうのはやはり自分の目で確かめたいものだ。だから思いもかけず治療室に長居をする事になってしまった。

「……妙なのを拾ってしまいましたね。お手を煩わせて申し訳ありません」

治療室を窓越しにデジレが覗き込んで、傍らに立つ男に言った。

「キアラ様も物好きと言うか、一応我々としては一般市民を守る立場にもあることですし、治療はします」

「うむ」

「——で、どうしましょう。彼の扱いはお任せしますが、大尉」

鼻の下に濃い鬚を生やす大尉と呼ばれた男は、それまで叶のパーソナルデータを読んでいたが、眼光鋭く少年の様子を窺うと、

「どうもこうも、このまま丁寧に帰宅してもらうほかはあるまい。

治療を終えて予後を確認次第、自宅のベッドで目覚めてもらう。それで記憶が混乱して夢だったと認識するのが最良のパターンだが……」

……

「それも投与しますか？」

「なにを」

「海馬をいじっても良いかとお聞きしました」

「そこまでする必要もないだろう」

叶の記憶を操作しようという提案に、大尉は顔をしかめた。

「そういう処置は、好みではない」

「しかしまだ年端^{としは}も行かないような少年ですが……彼はキアラ様に触れてしまいました」

「デジレ、そんなに不安なら“タグ”のインプラントを行えばいい」「監視下に……。そうですね、一番レベルの低いタグを。そうしましょう」

顎を撫でたデジレは、我ながら自分勝手に決めると笑顔を彼に向けた。

こうして叶の処置は定まったが、いかんせんキアラと言う根深そうな機密的存在に触れてしまった以上は、軍の監視下に置かれることになる。

つまり国家に直接管理されるも同然となってしまったのであった。

そこでは隠語として「城」と呼ばれている。

キアラが住んでいる研究棟のことである。

軍事施設の一つに過ぎないが、最大のセキュリティを得るためには軍の管理下に置くのが一番良い方法であり、国家としてもそれで安泰と考えているようだった。

タウンから数十キロの丘陵地帯の奥まったところに鬱蒼とした森山があつて、その麓に彼女が幽閉されているのである。

そこから人里に向かうには、幾重にも張り巡らされた検問を通過せねばならず、民間人はおろか、一般の軍人でさえ通行に困難さ、煩雑さを伴う。

その大の男でさえ無理と言われるようなところを、キアラは抜け出てタウンに遊びに行ったのだから、実に由々しき問題であった。

ひとつ。彼女はどうかやって警備を潜り抜けたか。

ふたつ。彼女は何のために此処を出たのか。

それ以上にキアラが何故、この軍事施設に閉じ込められているのか問われねばならないはずだが、ともかくとして俎上に載ったのは先の二点である。

「——堂々と真正面突破していますので、映像も大量にあります」
解析機械が詰め込まれた室内で、ダニロバ大尉とジョット軍曹が二人並び、繰り返し『正面突破』するキアラの動画を見ていた。

廊下の向こうから一人で歩いてくるキアラ。

一つ目のゲートには通常、ジョット軍曹或いは代理の者が立って待っているのだが、その人影は無い。

そしてゲートにいる警備員の挙動が奇妙で、目の前に居るキアラが視界に入っていないような素振りである。

アシストするアンドロイドですら反応が無い。

二つ目のゲートも、三つ目のゲートも、屋外に出て施設の敷地を出るまで、誰も彼女に視線を向けていないのだった。

「……これではまるで透明人間ではないか」

「はい。検問に当たっている連中から聴集中ですが、今のところ誰一人として『見た』と言う者はありません」

「それを私の不在中に連続二回もやるとはな。まるでタイミングを計ったようだ」

「それは、考えすぎではないかと」

「彼女の警備責任者、監督官としてはそうも思いたくなるよ、軍曹」
ダニロバは口の端を歪めて笑った。

少女一人も完璧に管理できないようなシステムだと嘲笑あざわらわれた気分なのだ。自分の存在意義まで否定された感の自嘲もするしか無い。

「あの映像を見る限り、我々は用無しと思われるようですね」
「用無しどころか、能無しである証拠を付きつけられたんだろう。」

しかし二回も脱走しておいて、随分と大人しく『城』に戻ったものだな？

「それですが……それであれば、タウンでおとなしく掴まったのも戸惑うところであります」

画像は、敷地の一番外側にあるゲートを潜って、森の道へと歩き出していくキアラの姿に変わった。

向こうから走ってきた車両を避けて行くのを見れば、透明人間になつたのも無さそうである。

「軍曹はキアラのお気に入りだからな。私は嫌われている」

「それは、単に近くにいた時間が長いだけではないかと」

「そうか？ “今回の彼女”には何人のお目付けが付いたかは知らないが、任務の長さが彼女の信頼を得ている証左ではある。今回の件については報告を上げて、仮処分を早めに下ろしてもらわねばなるまい」

部下の管理監督責任はダニロバ大尉、現場の責任を問われたのは

ジョットだが、ダニロバがどちらかと言うと事務方の軍人と言う事実は、偏見を持っていえば国家機密である施設に、後方の軍人を宛がう軍の組織自体が問われねばなるまい。

そのことも考慮して、ダニロバは自分達の仮処分を早くするよう上申するつもりなのだ。問題点には素早い対応が必要である。

「ありがたいですが、あまり軽いと逆に不安になります」

モニターのキアラは、最初に施設の廊下を歩いている映像になった。

解析を行っているオペレータが、そこでフウと息をつく。

「何か分かりそうか？」

離れた席から椅子を引きずってきて、ダニロバは脇に座り構えた。ジョットはその背後から見下ろす格好になる。

「——なんとも言えませんね。なにせこの人は普通に出て行っているだけなので、自然すぎて」

充血した目で首を傾げ、凝った肩に手を当てた。

雲をつかむよう、とはこの事だ。

「しかし、それではコチラも困るんだ。機械の故障もない。アンドロイドのセンサーでさえ無視されている。サイボーグ犬も嗅覚は効かない。自動攻撃システムの反応もなし。一体、彼女は何ものなんだ？」

キアラ込みで此処を統轄している立場のものが、今更のように彼女の正体に疑問を呈する。

「過去にそういう事態はあったのかね？」

「ちょっと待って下さい……あ、いや、待たなくてもいいですね……」

「“今回の彼女”にはそういった経歴はありません。外出はすべて保護者同伴、いずれも時間内に帰ってます。こんな問題を起こしそうに思えません」

キアラの一日いちにちの行動がこと細かく記録されているデータベースから、外出の項目だけを抽出してみるも、全てが優等生の行動である。

とは言っても、監視役と世話係が張り付いているからだが。

「と言うことは、映像から得られる情報は無し、か……」

「——今のところは。ただ、これにフィルターを掛けて、視認から科学分析に移りますので、何が出てくるか分かりません」

「さて、それはどのような」

オペレータはコンソール上に手を滑らせて、モニターの隅に幾つかのスライダーを表示させた。

「可視外光線フィルターを画像に被せるんです。このスライダーで強弱などが付けられます。そうしたら隠れてるのが出てくるかと思うのですが」

そう言っただけ使っていた大画面を四つに割ると、それぞれにコマンドを打ち込む。

スライダーが自動的に、徐々にズレながら動き始めた。

「通常の動画と比較して、変化があつたところを自動抽出します」

それぞれ色の違うフィルターを掛けられた四つの画面内で、目が回りそうなほど早送りで動いていく映像を、三人は固唾を飲んで見守った。

色は徐々に変えられていくためデータは膨大な量である。

いま使っている画面とは別にもう一つのモニターがあり、そこらには抽出された画像がコマ送りで再生されていく。

こつした現場に、初めて居合わせるダニロバは溜息をつく。

「難儀だな」

「自分もあまり経験がありません」

腕組みをしたまま、ジョットも溜息をしたそうに相槌を打った。

「原動画からの抽出と同時に、ゴミデータをふるい落とす抽出作業も同時進行ですから、すぐに出てきますよ」

掌に汗を覚えながらも、オペレータは出来る限りのコマンドを次々と入力していった。

そこから先は三人とも無言で処理の終了を待つ。

どれくらいの時間が過ぎたのか画面が突如として切り替わり、マ

ルチ画面が一つに戻った。

それにマシンが選びぬいた画像がゆっくりと映し出されたのである。

「――」

細かい異常を検知する設定だったので、思ったよりもゴミデータが多かった。

労した割りに決定的なものが見当たらない。

「――つまり、視覚的な問題ではないと言うことか？」

ジョットが戸惑ったように訊くと、オペレータも考えあぐねていたが、コレだけではないのですけれど、と断わりを入れた。

安易に答を求めてはいけないのである。

「じゃ、今日は収穫なしと言うことで、我々もこれ以上の時間を無駄にできない。あとは宜しく頼む」

やれやれと重くなった腰を上げて、ダニロバは部屋を出て行った。敬礼で見送ったジョットは、そのまま残って様子を見守りたいところだったが、キアラの居る研究棟に戻らねばならず、名残惜しうにモニターを振り返ってから上官とは反対側の廊下へと消えたのである。

「——今度のエア・モーターの展示会でさ……」
 嫌いじゃない話も上の空で、叶は友人の手元にある画像を見ていた。

それも視界に入っていると言うだけで、意識内にはない。

休んでいたスクールヘク々に登校し、授業ではなく補習の講義を受けていたのだが、いまいち身が入らず、空いてもいない胃袋に昼食を詰め込んで、楽しく過ごすはずの休み時間すら空虚であった。

教室の机でボンヤリとその声を右から左へと流している。

「話！ 聞いているか？」

バンと大きな音を出して叶の背中が叩かれる。

「うつ……わっ」

前にのめりそうになって慌てて友人の服をつかんだ。

「なんだよ、服が伸びるッ」

「叩いた本人が言っなよっ」

そのまま思いつき服を伸ばした。

「わー、止める止める」大げさに騒いで叶の手から上着の裾を取り戻し、後ろに飛びのく。「でも痛くなかったろ？」

「水飲んだるときとか、そういうの無しだ、セアド」

「だってお前さあ、人の話聞いてないからじゃないか。久しぶりかと思えば心此処にあらずだし、もうちょっと俺の相手してよ」

掌を叶の頭に載せて、セアドは顔を覗き込んだ。

「ワクチンとか打って後遺症なんじゃないの？ 俺は普通に済んだけどな」

「そんな事はないよ……」

一瞬、気がそれたと思ったのだが、「ワクチン」一言で再び沈鬱な気持ちに陥ってしまうのである。

「後遺症とか、そうじゃないんだけど」

言いかけて、グツと飲み込んだ。

それ以上は言えない。いや、言われないのだ。

以前のような、常にどこかが不調を訴える体ではないのはわかるが、それだけで喜べる気分ではない。

「……お前さ、悩み事あるんだったら吐き出せよ。なんたつて思春期絶好調だぜ？ 俺ら。こう、なんていうか、今吐き出さないと十年後あたりも暴れそうな」

「十年後も、つてそりや迷惑な……。悩み事……ああ、うん、悩み事ね、吐き出せたらね」

ハハと困ったような笑顔を作ると、反動で大きく息をついてしまった。肩も自然に落ちてしまう。

——あの不思議な少女キアラと出会ってから、二週間と言う日が経った。

“ 思い出を探しに ”

そう言つて、その空にも溶け込んでしまいそうだった彼女は居ない。

叶自身もトラックでの出来事以来の記憶が無い。

昏々と眠り続けて目が覚めたら、看護医療ロボットが甲斐甲斐しく世話する自宅のベッドだった。

目の前に母の顔があつて、心配そうにしていた。

（街で倒れて病院に居たそうよ）

——街？

（そう。それで容態が落ち着くまで眠つて、そのあいだにワクチン投与したつて。街の中でよかったわね）

何のことか分からずに、最初はそうなんだと思おうとしていたが、次第に頭がクリアになってくると、作られた記憶と封じられそうな記憶の相違をはっきりと区別認識し始める。

——すると、僕はタウンにいた事になるのか……

試しに家庭用の端末に自分のIDカードを差し込んで閲覧すると、

自分の病歴欄には確かに緊急搬送、入院、集中治療室、ワクチン投与、そして退院までの細かい履歴が書き込まれていた。

ワクチンと体が互いに馴染んで安定したところで、家に戻されていたらしい。

——知ってるのに……

キアラと、ジョット軍曹と、あのトラックでの出来事。

こんな大嘘を自分のIDに書かれてしまったことは、それなりにシヨックである。

無かったことにしなくてはならないのは、本能的に察知できた。軍が関与しているだけで事の重大さは充分に理解できる。

あの瞬間に、一人の少年が負うにはとてつもなく巨大な重責を共有することとなってしまったのだから。

——触れてはならない。

誰かが警告する。

——あれは良くない。

それは感情にも訴えてくる。

(なんでさ、なにが良くないんだ……)

それは穩便に済まそうとする自分だった。

そうして萎えそうになる自分に、必死に抵抗する存在も居る。

(何が悪いのか、誰も説明してくれないし、できやしないじゃないか)

中途半端は、許せないと言う。

オトナはいつだって都合の悪いことは、みつともないって隠すんだ。

隠したって見えるものは見えるのに、臭いものに蓋だけして汚物がどんな風に穢れていっても、みんな知らん振りをするじゃないか。キアラは、記憶に残らないほど外界の思い出が無いと言っていた。なんで彼女はそうして閉じ込められなくちゃいけない？知ってはいけないことって？

複雑に絡む思考が、ある一方に先鋭化しようとしている。

（彼女は、傍にいて約束したんだよな……）

最後の言葉は鮮明に覚えていたが、あの物々しい雰囲気ではそれは外部の力によって強制的に反故にされたものだと思われた。

（思い出だって探せていないのに……）

手伝うよ、って軽い気持ちだったのに、僕に理由が出来てしまったんだよ。

そついうの、運命的な邂逅だって難しい言葉で言うじゃないか。

どうしたら、いい……？

どうしたら、この理由を解決できるんだろう。

このモヤモヤとした異次元的な迷いは、数少ない手持ちの手段にエネルギーを集中させて、爆発的に顕現する事がある。

キアラと言う少女が指標になって、行き所を失ったものが定まって行く気がした。

こついうときは、どう動くべきか。

叶は時計を見て、昼休みの残りを確認する。

「——あれっ」

セアドが、急に立ち上がった叶を見上げた。

「どこ行くんだよ」

「図書館」

一言投げて、叶は小走りに教室を出て行くので、勢い吞まれたセアドも「えっ、あっ、ちょっ、待つ」とあたふた椅子から立ち上がった。

風が緩やかに吹きぬける校内のただっ広いホールを抜け、廊下の先に隣接する図書館めがけて駆け込んでいく。

「なあ、なに調べるんだよ。急に読書とかしたくなつたのって冗談だよな？」

なぜか付いてきてしまったセアドが、後ろから声ごと追いかけてくる。

「読書じゃないよ。もしかしたら読書になつてしまふかもしれないけど、先生だって言ってるだろ？ 疑問があつて答えを得ようとする

るなら、まずは資料探しからだって」

「うわぁ……なんてマジメなの叶さん。すごく自発的ってヤツですね」

「なんだよ、セアドも覚えてるじゃないか。取っ掛かりって、どこにあるんだよな」

高くて丸いアーチ型の天井に明るさを押さえたライトが並んで点いていて、自分だけを照らしている。その下に居る叶たちは、光量は少なくとも広範囲を明るく満たす照明の傍らにいた。

居並ぶ利用者の後ろに立つのももどかしかったが、図書館のフロントでIDを見せ、専用のキーを借りると、館内の中央を貫く幅広の通路に置かれた専用端末の一つに座った。

ばたばたと落ち着き無い様子に、何人かが叱責の視線を送って寄越す。

——さて

意気込んで来たのは良いけれど、何から手をつけてよいか分からない。

「……」

端末の前ではたと止まる。

「どうしたんだよ」

セアドが怪訝そうな顔で叶を見やった。

そのセアドを見つめ返すと、「例えば……、まったく意味不明な事件が起きたときに、何から考えるべきなんだろう？」

「そりゃ……」

口ごもるセアド。

「なんでそんな事件が起こるんだよ」

「なんでって……たまたまそこにいて、そしたらそこにそれが居たんだよ」

「えらい抽象的でわかんないや。俺がそこに居たわけじゃないからさ——でも、そこで手掛かりになるようなものがあつたなら、それで検索してみたらいいんじゃないか？」

「手掛かり」

「そうだよ。例えば……なにか物を拾ったとか、そこで何をしたとか、あと、誰がいたかとか」

「ああ、自分の身近にあったものだね」

「うん。んで、ものでも何でもいいけど、名前とかあるじゃん」

それで突破口が急に見つかったような気がした。

名前――

そうだ、名前だ。

名前と、容姿と、言動と、これだけ情報があるじゃないか。

キアラ――

検索のキーワードがあることに気付かされて、叶かなうはセアドに抱きつきたい衝動に駆られたが、それは抑えて端末の検索モードを設定した。

館内の図書資料だけではなく、巷間溢れるネタも拾えるよう範囲を広げる。

「これだと、もの凄い時間掛かるんじゃないか？」

「うーん、物凄い量が出てくるか、物凄い少ない量になるか、それは分からないけどね」

まず最初になにを打ち込もうか。

そうは思ったものの、ターゲットは既に決まっているも同然である。

（名前だよ、君の——）

キ・ア・ラ。

たちまち可能な限りのライン全てを駆け巡りはじめた。

「キアラ？」

「あ、うん……」

まさか国家機密だなんて言えないし、いきさつも口にはできない。まさかIDカードのカルテに、あの人たちからのメッセージが入ってたなんてもつての外である。

「——出てくるなあ。キアラなんて女の子のありきたりな名前なんだから。見なよ、ここからどうやって探す？」

最初の難問が早くもやってきた。

画面いっぱいキアラと言う名前に関するデータが羅列する。

早くも情報の海に溺れそうになった。

そこからまた絞り込んでいくしかない。

他に、どうする……

君は、なにと繋がっているんだ。

――病院の階段で初めて会って……

――赤い靴を買った

――お昼を食べて、タウンをぶらぶらとお喋りしながら歩いた

――森から出てきた

向かいの島に行つて博物館に入つて……

（名前以外に、何があると言つんだ）

素性不明の人間とは、せいぜいがその程度である。

軍が関与しているからには、そうそう行き着けるようなところではない。

少年一人が指一本すら上げることの出来ない、圧倒的な力の壁。

別方向からピンホールを狙うようなアプローチを望むところだが、こればかりは神の援けが必要であつた。

叶は眼を閉じた。

（落ち着いて……、拾う物が無ければ、会話から拾うんだ）

記号の羅列のようで詩的な響きをも持っていた、キアラの言葉の数々を思い出せるだけ意識の上に昇らせようと試みる。

どれも正確に覚えているわけではない。人間の記憶など曖昧で、時にはその心情に合わせた情景をバツクに捏造だつてする。

おまけに、どうして出逢つたんだろうかと、雑念が入ってしまう。何度も彼女と歩いたコースを思い出して、その時々会話を掘り起こしてみるが、コレと言つた収穫など望むべくも無い。

黙つて瞑想状態になつてしまつた叶の脇で、セアドが端末に表示された「キアラ」のデータを適当に開いて閲覧し、ボソボソと呟く。「しかし……けつこう使えるもんだよな。自分ちでもやろうかな、勉強で資料探すとき」

それから、まるで博物館みたいだ、と言つた。

――そこで叶はハツとする。

博物館？

良い思い出が無いのが正直なところだが、しかしそれが引つかつた。

目を見開いて拳の指を歯に当てる。

画面が叶の視線を感知して、バックライトが減光された。

（博物館だ。博物館——でもなぜ博物館……）

入ったのは良いが、宇宙展示室の入り口ですぐにメに遭ったから、特別なことは無いはずだった。

その前だ。

その前に。

頭の中に映された映像を後ろへと巻き戻す。

情報案内でコース設定をしているとき、キアラはこのアップリウ星系のホログラムを見てたんだ。

”この星たちは、全部なの？”

この星達は——

星の数を気にしていたのだ。

星って、惑星のことだよな？

（惑星と、数と、キアラ？）

接点は皆無である。

「惑星」……か……」

キアラのデータの海に、惑星のキーを入れてみる。

お陰で約三分の一くらいに目減りはしたが、困難であることに変わりは無かった。

「この、女の子と惑星とって、どうなってるの？」

まったくの蚊帳の外であるセアドには、もっと分からない。ここで飽きたのか、ちょっと色々見てくると言って席を立つ。

「静かにしろよ」

小声でその背中に言いつけると、かすかに期待をこめて素早く『軍』を付け加えた。

途端にヒット数がガクンと落ち込む。

（これは……正解だったかな）

急いでキューブ・メモリを取り出すと、コンソールの隅に置いてデータコピーの準備をする。

それから身近に人が居ないか見回して、幾つかのデータを開いてみるも、殆どが関係のない内容であった。

キーワードに限って言えば、惑星と軍事関連の資料が一番濃厚だったが、そこにキアラの関係性はありそうにない。それは仕方が無いことだ。

（なにしろ、国家機密だからな……）

傍目にはいたいけな少女と、彼女を拉致監禁する横暴な軍の構図しか浮かばない。だが、あのジョット軍曹の丁重な扱いといい、どうしても彼らには必要な人物である存在感と言い、そのギャップを埋められる根拠が無い今、まったくの混沌カオスなのであった。

（連中、彼女の事を『キアラ様』って言ってたな……）

この星系には役職以外の身分差は無い。すると彼女は他の星系からゆえあつて連れてこられたのだろうか。

てことは物語にありそうな、キアラはどこかのお姫様でそこで叛乱とか内戦とか起きて、囚われの身になった彼女を、このアップリウ政府に委託して閉じ込めているとか――

（――いや、いやいやいや、違うだろ）

うつかりした妄想に、頭を振る。

そんなよくある、王侯貴族臥薪嘗胆悲劇的物語ワンパターンな王道ではないだろう。

そういった身分制度のある星は有るが、どこかでクーデターが起きた話はザラにあっても、アップリウに亡命とか捕虜の収監事業とかは、知る限り聞いたことがない。

試しにそれも検索してみると、三百年位前に亡命騒ぎの事実はあるものの、その子孫が百年後くらいに晴れて凱旋帰郷している。

官報に記されている新規事業立ち上げでも、ありきたりな産業以外見当たらないのだ。

（一般人に知らせてはならないものもあるだろうけど……表にさせ

ないとなれば……どっかの傭兵部隊とか駐留してないかな。非正規ルートとか)

妄想が別のところに発展してしまったようである。

そうなら思いつき次第、手当たり次第。きっと何かに当たるだろう。

「あと……惑星か……」

アッペリウ星を周回する惑星は七。

どう数えても『七』。

増えもしないし、減りもしない。

モニターのアッペリウ星系を俯瞰した画像の中で、七つの惑星がグルグルと回っていた。

そのうちに午後の授業が始まる時間になったので、慌ててキューブ・メモリをポケットに仕舞いこむと、セアドを探しに席を立ったのである。

010 / 「SCENE1」 宙と大地の狭間

ヤノ星上空の宇宙に浮かぶ、宇宙航路管理港。

いましがたドッキングしていた地上降下をしない大型船が、乗り換えの客を降ろして離れたばかりである。

『第四惑星からの貨物船687が十五分後にラインFにドッキングします。スタッフは隔壁内へ退避してください——』

管制官のよく通る声が響いた。

窓からも見えるアームは格納せずに、船をいつでも捕まえられるよう広げてある。

誘導灯がレール状に数キロの長さで点灯され、牽引レーザーが照射されるまでゆっくりと暗い宙空に点滅していた。

港は中継点の一つとして、宇宙船がひっきりなしに付いては離れ、離れては行く。

筒のような胴体に、幾つもの平たい串を刺したような形状のドッキング・ゲートを備えたこの大きな施設は、一つの都市のように建造されているために、宿泊やショッピングは当然、中継港はしご観光ツアーが組まれることもある。

この宇宙港に勤務する職員は、そういう快適さも相まって家族ごと引っ越してくるそうだから、さぞかし居住に優れた環境なのだろう。

その華やかな面もあれば、その裏には地味に下支えをする影もある。

宇宙港の下部は、倉庫になっていた。

倉庫とは総称であるが、実際のところは水分再処理や様々な廃棄物を溜め込む施設もあって、あまり人が好んで行くところではないただ、それらに隣接しているブロックには貨物が入るために、荷役のロボットと、時々人間が降りたりもする。

慢性的に人員不足と言うのも相まって、管制官の真知村まちむらもそこで

汗だくで動いていることもあるのだった。

「——今度の休みはどうしますか？」

などと急に言われて、危うく入力タッチを間違える瞬間だった。

「休みい？ 無いよそんなん」

俯いたまま返す。

「またまた。お子さんが足元で待ってますよ」

足元とは彼らの足の下、つまり地上のことである。

「いやあ、そんな暇無いから」

「でもここんどこ、ずっと残業と副業多いでしょ、真知村さん過労で倒れたら私も困りますし」

「困ってんのおたくだけじゃないの」

まさかあ、と笑うと資材の入った荷物を抱えたまま、彼女は倉庫から出て行った。

この宇宙港が宇宙港たる所以の巨大な倉庫で、荷物の検査チェックをしていたのだが、最後の一隻分が終わりそうなので、これで切り上げようとしているところだ。

「——おい、そのの、そのロボット。そうそう、これを転送しておいてくれ」

抱えていたボードを、荷揚げをしていたロボットに差し込んで、倉庫のチェックデータを取り込ませた。

「ラインGの7番ゲートにジャンク屋が入るぞ！」

「Gラインってドッグだぞ！ デブリ回収の途中でなにやらかしたんだ！」

「知らねえよ！ 船殻に開いた穴にジャンク突っ込んでけ！」

向こうで大声を上げるスタッフを見やって、俺はこれから何も見ないで帰るからな、とロボットに話しかける。

『お疲れサマデス』

人間の仕草を真似て手を上げた。

「じゃな」

半ば強引に職場を放棄するが如く、瑞口は倉庫の扉の外へと出た。

水分がほしかったので、休憩を取りに『社員食堂』に向かう。そこにはいっぱしに観葉植物が置かれ、人工太陽光のサン・デッキが備え付けられてはいたが、どう見てもプロのセンスではなく、歴代職員の涙ぐましい努力の痕跡でしかないちぐはぐな構成であった。

これでも少しは疲れを癒そうとの心遣いであるので、誰も大々的な改造は行っていない。

その隅にソファのコーナーがあり、誰もいないのをいい事に、カップに入った氷水を手にしたままだらしなく腰を下ろした。

「うあーっ、疲れたあ」

テーブルにカップを置いて、寝転がるように全身を伸ばす。

「部屋に戻って、風呂入って、ビール飲んで、寝るぞ」

その前にメシだメシ！

首を左右に振りながらストレッチで体をほぐしていると、誰かが食堂に入ってくる音がした。

「あっ、真知村さんお疲れ様です」

奥にいたにも関わらず、目ざとく真知村を見つけて挨拶をしている。誰かが。

「……よう。疲れたよ」

「あれ、今日は管制室にいなかったじゃないですか」

「ずっと倉庫で手伝ってた」

「えーそりゃまた難儀な。管制官がなにしてるんですか」

「お前らだつて管制室慣れたら来るんだぞ、ここの伝統だ。それくらいいか、俺は、休む」

「そんなに力まなくなたって、休んじやって下さいよ」

「そうします……って、くっそ、休んでやる」

そうして軽口を叩く職場の後輩たちも、なぜかソファに溜まって雑談を始めた。

その雑音を子守唄代わりに居眠りでもしようかと思って、腕組みをし壁に寄りかかろうと構えたときである。

「——その周波数なんだけどさ」

「何人かの船長から聞いてるんなら、事実だらうけど」

「管制室でも計測したほうがいいと思うか？」

「……記録データは貰ってあるよ」

「ここ三日ばかり倉庫に詰めていた真知村には、得体の知れない情報であつた。」

「これは聞かすにはいられない。途端に目が覚めてしまった。」

「なんだ、周波数って」

「二人の後輩がちよつと驚いたように振り返つたが、すぐに説明を始める。」

「休み明けにでも聞くかと思つてたんですが……実はここ何日か、不思議な周波数が計測されているという話を、幾つか耳にしまして」

「なんだ、その周波数って」

「いや、話だけですよ」

「構わんよ。誰から聞いたんだ？」

「幾人かのオペレーターとか船長です。彼らが下船した時にたまたま話が出たんです。同じような内容を言うんで、管制でも調べたほうがいいのかと思つて」

「それは何処から発振されたものか分かるか」

「特定できないと言つてました。定まつた方向からではなく、複数の方向から大きく緩やかに干渉してくるような感じでやってくると」

「……なるほど」

「それで、暇を見ながらドッキングする船にそれとなく訊ねるんですが、周波数自体も安定的ではないのか、数種類検出されることも判明してます」

「いつ頃から分かるか？」

「そうですね……ええと、いつだったっけ」

「すぐに答えられなかったので、もう一人の方に援けを求めた。」

「二週間か三週間ほど前だと思います。それ以前にもあつたようですが、この期間が一番顕著に」

「ふーん……これはちよつと考えたほうがいいかな」

「重大なことにならなければいいんですが……」

「そうだな、これは俺も参加してみるわ。アンテナを三本くらいジヤックしたら間に合うかな？」

「三本って……大きいのだったりしたら、港のアンテナ全部ですよ」

「冗談です」

そして怪情報を仕入れた真知村は、それじゃと言って立つと水を一気に飲んだ。

多少咽^{むせ}んだが、何事も無かったように空のカップをゴミ箱に放り投げ、『社員食堂』を出て行く。

（得体の知れない周波数が……）

もしかしたらどつかの未知の星が出してる電波かもしれないし、或いは誰かが変なのを発明したのかもしれないし、この広大な宇宙なにが起きてもおかしくは無いのだから、面白そうだったが当面は気にしなくてもいいかもしれない。

体も頭も疲れていると、ついつい面倒くさがりになってしまう。

（いかなー……せつかく若い連中がやってくれたのに、放つてもおけんし……）

倉庫の上階層デッキを歩きながら、漆黒の宇宙空間と紺碧の母星の境目をぼんやりと眺め、それから二日の休暇をとるために、管制室へ申請しに向かった。

たぶん二日とも食う・寝る、食う・寝るの繰り返しになると思うので、働き盛りの頭をムダに停滞させないよう、若い管制官が取っておいてくれる周波数とやらのデータも持って帰宅することにした。

それから、倉庫に検疫用ロボットと人員を増やすように、宇宙港管理局へ文句を言ってやろうと思っていた。

011 / 「SCENE2」 顕れた徴（しるし）

「今日のご機嫌はいかがですか」

髪を梳いてもらっているキアラを前に、ジョット軍曹が朝の挨拶に訪れた。

そうして人に傳かすかされてる様は、いかにも高貴な身分のそれである。

幽閉である事実を除けば何一つ不自由しない優雅な暮らしだが、現実はそのもいかない。なぜなら彼女の身の回りを世話する女たちでさえ、監視役も務める現役の軍人だからだ。

男子禁制の『城』において、医師や特例以外の一般的な男が彼女と面会できる場所はこの食事をするところ以外に無い。

ジョットはいつも朝食の折に訪れ、彼女の様子を確認するのである。

「いつもと変わらないわ。本当に」

新鮮な果物を口に運びながら、少女は「今日のご機嫌」を無表情で答えた。

おそらく生まれてこの方、少しも変わらない光景なのだろう。

キアラの脇に座ったジョットの目前に、果汁の入ったグラスが置かれた。

別に彼が好きで頼んでいるわけでもないが、これがキアラの傍目そばめ付けになった連中への慣例となっているのである。

叶かなと引き離されてから非常に気分を害したとかで、三日間は出てこなかったたので、周囲の人間は、ハラハラしながら彼女が出てくるのを待っていた。

「ですが」

グラスに口をつけて口腔内を潤す程度に果汁を含んだ後、ジョットが切り出す。

「昨夜も、病状の報告がありました」

キアラは黙々と食事を続ける。

「このところ回数が増えています。あの日の無理が祟ったのではありませんか」

「……」

「外出なさりたいなら、私にお申し付け下さい」

何処を見ているのか視点が何も無いところに定まっていたが、ジョットの物言いは勘に触ったかもしれない。

「言ってもダメだから、一人で出たんでしょ」

「キアラ様」

「もうずっと、こういうことばかりだもの、たまには冒険もいいかと思ったの。どうせ私は長くは持たないんだから。デジレにも言つてやったわ。厄介払いできるものね」

たぶんこれが彼女の精一杯の嫌がらせなんだろうが、内容が深刻なだけにジョットの顔は僅かに強張った。

「そんな事はありません。まだ先は長いのですから、自暴自棄になつてしまわれないよう自愛ください」

「いいの。もういいのよ」

面倒くさくなったキアラは、それについての会話を打ち切りに入る。

「ね、もういいの。どういう事が知らないわけ無いでしょう？」

そこで今日初めてジョットの顔を見た。

その薄空色アズールの瞳はしかし、それ以上の何かを含んでいた。

——キアラの住む『城』とは別棟の研究室で、デジレがなにやら熱心に書き物——と言ってもコンソールを叩いているだけ——をしていたが、ドアを開けて入ってきた助手のために、中断しな

くてはならない事になった。

これはデジレ本人にとっても重大なことだったが、年若い助手の顔をみて文句を言うのは止めた。

ただし、一言の皮肉を確実に投げつけられるのは、彼の性格上諦めてもらうしかない。

何しろその書き物とは、過日のキアラ脱走について研究者からの科学的見地を盛り込まなければならぬもので、原因が判明したのでもないから、いかに本物に見えるか仮説を立てての報告書なのだ。報告書が仮説で良いのか、と問われれば何とも言い難い。それだけ分らないことも多いし、キアラに強引な手を使って尋問するわけにも行かないだろう。それだけ彼女には複雑な理由があつて、誰も手がこまねき、考えあぐねているのだから。

「短い人生を自分の為に使つてはいけないのかね？」

彼は独身主義だったから言えるセリフなのだが、助手にはちくりとも刺さらなかったようである。

「——先生、申し訳ありませんが、様子を御覧になっていただきたいと思ひまして」

ずりおちそうな鼻眼鏡をした歳若い女が、デジレ自身の事などに気にせず用を言いつける。

それを聞いたデジレは、多少害した気分もどこへやら、M字型の額をつるつと撫でると、席を立っていそいそと助手の後を歩くのであつた。

「面白くなかったら戻るぞ、リョーコくん」

それはちよつと大人気ないと思うが、足取りが彼の心理状態を全面的に現している。

「いえ、私はリョウコです」

行く途中に、何があつたか詳細を聞かないのがデジレの悪い癖だ。彼の執務室から廊下を五十メートルほど歩いたところに警備が立っていて、出入りする人間を細かくチェックする。

一体どれくらいなのか、厚みのある頑丈な壁に囲まれて、ちよつ

とやそつとではネズミすら穴を開けられそうにない。

デジレでさえ此処を出入りするときは、全身をスキャンされて丸裸にされるのである。

ただこのスキャナは、健康診断もついでに出来るとあつて評判は良いのだが。

警備兵が防護ガラスの向こう側で敬礼をする。

観ようによつては複雑に入り組んだ出入口。あまりな体型には不向きのゲートを通りながら、金属のバーが幾つも並ぶ回転扉を手で押しのけた。

次に入ったブースで着衣の殺菌と微細な埃塵を取り払い、ようやく秘密の部屋にたどり着いたのであつた。

あいだをパイプと機械に繋がれた透明なタンクが居並ぶ。その脇を歩きながら様子を見ていたが、途中でなにを見つけたか、近くにいた研究者に「このタンクの汚れが目立つから、装置の分解フィルターを確認するように」と注意した。

さすがにエキスパートだけあつて、その洞察力、眼力の強さは誰も敵わないのだろう。スタッフが慌ててカバーを外して中に頭を突っ込んだ。

最奥には薄暗い光に照らされた大きなタンクが設置されて、中に何かが蠢いている。

胎児、いや、それにしては大きすぎるから、赤ん坊と言つたほうが正しいか。

羊水の中で計測用のコードを貼り付けられ、或いは体に刺しこまれて浮かぶ。

へその緒は上の方から垂れており、用途不明なナノチューブに繋がっていた。

デジレはその前で、いつものように研究者にありがちな満足感を得るため、腰に手を当てて暫く眺める。

「――変わったところがあるのかね」

さすがの彼も、どこがどう異なるのか見つけられないようである。

やはり説明は来る途中で聞くべきか。

「寝返りを打った程度で、彼女自身に大きく変わったところはありませんが……ですから、それよりコレです」

助手がキューブ・メモリを受け皿に置くと、テーブルモニターに映し出された立体ビジョンには幾筋かの波打った線が現れた。

それは大きく、小さく、時に激しく、そして穏やかに、強弱をつけながら不規則な波を作り出している。

「——これは？ ……この分かりにくい……」

「これには心拍数、心電図、脳波、脳磁図、筋電図の計測とパルスオキシメータなどの波形データを併せたものですが、この——」
ホログラムに指を突っ込んで指し示したのは紫色の波形である。

触れた波形が太く大きくなった。

「これですね」

一瞬、怪訝そうに聞いていたデジレは目を見開いて、紫の波線に顔を近づけた。

「これ」

「ええ、コレです」

彼の部下は優秀でないはずがない。しかし、それでも耳は疑ってしまうのである。

「どこから」

「彼女ですよ」

「何かの間違い……ではないとは思うが、彼女がこれを何処から発振したんだ？ と言うか、これは普通の脳波であって？」

立体に映し出された波形に視線を定めたまま、デジレは周りを歩き始めた。

「いや……君が、リョーコ君がそういうからには、別に何かあるんだろうな」

一瞬だけ沸騰した頭をすぐさまに収めて、素早く頭脳を回転させる。

「仰るとおりです。彼女の波形がとある形状に似ているのでは無い

かと思い。ありとあらゆるデータを取り寄せました。それで重ね合わせたら、偶然とはいえこのように上手く重なったのです。どうでしょう先生、これは考えられますか？」

手元で操作すると、波線はここ一ヶ月ほどをまとめた流れに変わる。

そこに、別から取得した波を加えた。

「——これは……ほぼ同期シンクロが取れているな」

「そうです、先生。」

「実に興味深い。同調している赤ん坊か……。しかし人類は居住している星の脈動の中、その影響を受けて育つことから、あまりに通常の出来事であると言えまい。だから影響下にあると考えねばならない。——ところが、この共振が変化してきており、それに同調しているのだとしたら?!」

「その仮定も既に実証済みです」

助手は冷静に答えた。

「よからう。これは単なる医療問題ではない。惑星気象局にも問い合わせるべきか、それともこの軍事施設をフルに使うべきか悩むところだが、私は自分の権限を執行することにした。司令官に話しに行く」

012 / 「SCENE3」宇宙のゆらぎ

第五惑星の『ウォーター・ファーム・カンパニー』での一仕事を終わったナラネは、シャトルで帰路の途中であった。

少しすし詰めな感じに乗客がひしめいていたから、搭乗直前にグレードの高い部屋を問合せ、たまたま空いていた幅広く寛げるボックスに居座ることが出来た。

「よっころ……せっ」

大きなスーツケースと手荷物をドア脇のバスケットに放り込む。

ついでにその勢いのまま、定期便にしては贅沢な部屋のソファに、尻を突っ込んで背中を埋めた。

ハアーっと、それまでのストレスを含んだ呼気を吐く。

およそ六億キロの旅を高速船で、何もなければ二日で到着する。

それまでに眠り続けていてもいいが、眠るにも体力があるので少し何かを食べてからにすべく、レストランかビュッフェに行こうと思いついた。

部屋に備え付けられ、『ようこそ！ ボル社の定期航路便を御利用下さいましてありがとうございます』と大げさな自社広告を待ち受けにしているマルチビジョンで、船内を探検する。

旅に旨いものは付き物であっても、体も心も休めたいナラネは、あまり畏まったレストランは避けたかったので、アルコールも置いているビュッフェに行こうと決めた。

たぶん、レストランのワインでは酔えないだろう。

『宇宙酔いをされる方はご遠慮下さい』

警告が画面の中央に赤く表示される。

なんだか自分が諭されたような気がして苦笑いすると、少しだけ身繕いをし、部屋の外を出た。

ちょうど斜め向かいのドアも開いて客が出てきたが、ナラネとは目的が違うらしく、廊下を歩く途中で別々になる。

螺旋階段を下りて、いくつかのレストランが並んだ通りの一角に、ビュッフェがあった。

そこは出航前から既に込み合っている状態である。船尾に近いところで展望できる大きな窓が、より店内を暗くしているかのようである。小さな星では、視点を結ぶ印しるしになっても照明の代わりにはならない。

「立席でもよろしいければ」

案内の女の子が申し訳無さそうにしたので、ちょっと気が引けたが入ることにした。

入って左側の長いカウンターにつくことにしたが、カウンタ―は思ってたよりも空いているので、無理やり体をねじ込むことをしなくて済みそうである。

「軽くつまむものと、そうだな、アルコールも軽めのを」

いい加減な注文を出しても、そこはプロだ。

バーテンダーの格好をしたナラネと同じくらいの中年男性が、額いて皿とグラスを棚から取り出し始めた。

最初に出されたコップの水が、僅かに揺れたように見え、それでシャトル便が出航したのを知る。誰も出航サインのモニターなど見ていない。

「地上から出るより簡単でいいな……揺れも少なくて」

動いていても窓の外の風景は変わらない。

もちろん、乗客の足の下には、球体の惑星が手をこまねいて待っているわけだが。

つまみが最初に置かれる。

動物性のものと植物性のもの。

腹持ちも良さそうだから、これは好き嫌いなく食べようと思った。「これはウォーター・ファームの材料を使ってますから、美味しいですよ」

カウンター内に入ってきて手伝いをしていた女の子が笑顔で勧める。

「そうかい？ それなら安心だね。ウォーター・ファームのは何を食べても旨いから」

何食わぬ顔で我が社の商品を褒め称えた。

「他にもいろいろ取り扱ってますから、ご要望がありましたら、どうぞ！」

ニコニコしながら彼女がトレイを持って通り過ぎ、なにやら芳しい残り香の中でナラネは手をひらひらと振ってみる。

それから皿の上に乗っているものを一つ口に放り込み、カウンタ―に肘を付いて飲み物を待った。

「さて……この二日間をどう有意義に使ったらよいか、それを考えて終わりそうだな」

込み合っているテーブル席は、見ているだけで疲れそうだったので、体の向きをまたカウンターに戻す。

そこで、拍子に思い出したことがあった。

胸のポケットのボタンを外すと、中から白っぽいケースを取り出してじっと見つめる。

「このお使いをするまで、ゆっくりできそうにないか」

上司のミヤマから預かったものである。

戻ったら息子にコレを、と言われて持たされたので、ヤノ星に到着次第、上司宅に向かわねばならない。

なにやら約束だといい、サブライズだからこの機会にという事なのだそうだ。

（大きくなっただかなあ……いや、大きくはなるが）

知らない子供ではない。あるいは忘れられても奥さんに渡せばいいのだから、大した用事ではないので自宅と上司宅のどちらを先にすべきか、帰る前から迷っている。

色々と惑星ヤノに着いてから辿るルートを考えてが、結果、用事は先に済ますことにした。

「どうぞ」

タイミングよく飲み物がやってくる。

細長い円筒形のグラスに、乳白色に黄色がかった液体が入っていた。

「両方の口は行けるかと思ったんですが、甘さはあっても控えめ、酸味で疲れが取れるようにコチラに致しました」

「気が利くね、ちょうどそんな気分だったよ」

バーテンダーはちよつとだけ会釈をして、つぎの仕事に入る。

青い天板のカウンターに、上からのスポット照明がグラスの容姿を映し出していた。

その光景とバーテンダーを交互に見やりながら、ナラネはちよつと出かかった腹を反省していると、

「ここ、予約入ってないよな？」

落ち着いて呑もうと言う思惑が大いに外れる声が、ナラネの隣で響く。

「先に入った者勝ち、でございます」

「あ、ほんと？　じゃここに三人ヨロシク」

若者が彼の隣五十センチくらいの間を開けてカウンターを占領した。

「何にいたしましたよう」

一応メニューは持ってきたのだが、そんなものに目もくれずノリで注文を出すのである。

「えー、あのさ、あのアンタの後ろみたいに真っ黒なカクテルとか」

若い男が指差したのは、バーテンダーの後ろにある幅広の大きな窓だ。

遠目に別の宇宙船が逆の方向に行くのが見える。

「真っ黒、でございますか？」

「そうそう、宇宙みたいになんか変なの作ってよ、イカ墨とかで」
そういう勢いって、もうないなあ。

下を向いてニヤニヤしながら、ついつい右耳を大きくして会話を聞いてしまうナラネ。

だからと言って話しかけたりする事も無く、喉を潤して体に染み

渡る刺激にいい気分だ。

「ところでな——」

一人が急にトーンを落としたので、ナラネの集中力が途切れ、店内のざわめきが流れ込んでくる。

「……まだだ」

「ホンとか？」

「見えるんだな——……」

「俺には見えないぞ」

「だからさ、気のせいなんだって」

「目は酔ってない」

「ヤノに近くなれば、お前も絶対見えるって。賭けるか？」

「やめとけ、どうせお前の目玉でも借りなきゃムリだし、荒唐無稽な話なんだろ？ ファンタジー」

「バカにしたな。俺は何度でも見てるんだぞ」

カウンター越しに彼らが指差し、ナラネも横目で指の先を見ているが、別に変わった風も無く、いつもの宇宙である。

「——あんまり人に言うなよ？」

「言ってねえよ」

何が見えるのか知らないけれど、彼は勘がいいのかもしれない。もしかして宇宙の亡霊でもいるのかな。

ナラネはそこで、ふと思い出したことがあった。

（誰だったかな——）

どこかの宴会で聞いてたら覚えてない可能性もあるが、たぶん会社でだったと思う。

（でもあれは伝説だって言ってたよな）

そこで眠気が襲ってきたので、皿に載っている残りを口にほおばると、グラスを傾けて一気に飲み干した。

戻ったら、もう一件の大事な用事があるのを思い出したのだ。

キアラと惑星と数、と言うキーワードを元に、叶かなつはあれからずつと答えを探し続けている。

時間さえあれば自宅や学校のモニターと睨めっこをし、途切れない情報の海を泳ぎまわっていた。

叶があんまり相手にしてくれないので、セアドが自宅に入り浸るようになってしまっている。

邪魔にはならないが、殆ど手助けになってないのも事実だ。

時に睡眠不足にもなるし、頭を使いすぎて熱まで出そうな勢いだけはあっても、成果は出そうに無い。

情熱はあっても経験から得る知恵が無い、と言うのは致命的である。

なにをしたら良いか途方にくれ、一眠りすればまた突破口を求めた。

（肝心の「キアラ＝軍」の構図が出てこない……これじゃどうしようもない）

同じデータを行ったり来たり、削除を忘れたり元に戻したり、焦燥と悲壮が交互にやってくることもあるのだが、たかだかイチ市民の少年に、そうそう答えなど出るわけなど無い。

「ご飯よ」

母が昼食に呼ぶ。

空腹すら忘れていたのを思い出す。

「来れそう？」

熱中する背中へ、遠慮がちにもう一度声が掛かる。

「——今行くよ」

画面を流れる文字の羅列を読み流してからパチンとモニターを消

し、ダイニングに赴くといつもより食卓のメンバーが多いことに気が付いた。

「なんでセアドが」

「いや、お腹すいてるだろうって言うてくれたんで、お勧めされよう……文句あるか？」

「調子いいな——あれ？ 母さんは」

苦笑しながら見回すと、母が「お客様がもう一人増えるのよ」と半開きになっていたダイニングのドアを全開にして入ってきた。

「あ」

「どうぞ」

新しい客は、浅黒い肌の中年の男だった。

「やあ、どうもこんにちわ」

初顔合わせにしては親しげに笑顔を寄越す。

「えっと……」

戸惑う叶。

「覚えてない？ ナラネさん」

母が懐かしさを満面に、男を紹介する。

「ナラネさん？」キョトンとした。

「あ、奥さん、もう大昔だから覚えてないかも知れませんが」

「でもほんの十年くらい前よ？ ホラ、みんなでキャンプに行ったりして」

熱中していると切り替わりにくい頭が、母と男の顔を交互に見つめるうちに、次第に記憶が掘り起こされてきたのだろう、唐突にナラネのイメージが鮮明になった。

「キャンプでお酒飲み過ぎたナラネさん！」

あまり宜しくない思い出が強烈に残っていたようである。

「いやー……それを覚えていられるとは、お恥かしい」

照れて頭を掻くさまは、安定して変わらないナラネの人柄を表しているらしい。

「どうしたんですか？ 急に」

「ホラ、会社が違ってたでしょう、第五惑星でお父さんの下で働くことになって、一旦こっちに戻っていらしたそうよ」

そして、思いつ話の前に先に昼食にしましょうと言って促した。

家事ロボットが皿を並べて給仕の準備をし始める。

ナラネは、自分はお茶だけでいいですと席に着いたが、着ていたジャケットの内側をまさぐると、封をされた薄いカードのようなものを取り出して、叶に差し出した。

「それ、なんすか？」

目ざとく訊いてきたのはセアドである。

「なんだよ、セアド関係ないだろ……なんです？ コレ」

「叶君のお父さんから預かってきたんだけど、びっくりするようなプレゼントだって」

「ええー、驚きませんよ。ここんといろんな事件起きてるんですから」

鈍く銀色に光る硬くて薄い容器の蓋を開けると、中から透明なカードが半分飛び出してきた。

そのカードの端を摘まむと、窓に向けてかざす。

細かい字と金色の線が見えた。

暫くそれを目に近づけて眺める。

「これって——」

書かれた文字は、容易に読み取れる。明らかに宇宙空間を航行する船の絵がプリントされていた。

「ホント?!」

「あ、そのような顔をされても、お父さんからの頼まれ物ってだけですから」

目を見開いて輝かせる叶に、ナラネがちょっと焦った。

「だって、これ、チケット！ 母さん」

別に貰っていたお土産を片付けている母に呼びかける。「宇宙行きの乗船チケットだよ！」

「ええ？ それは良かったわね」

嬉しくて何度もカードを窓側に向けてかざし、ナラネにも確認を強要した。

「これは、予約チケットじゃないですね」

「どういう仕様？」

「贈答用のプリペイドです。これで宇宙船の旅費が支払えますよ。もちろんそれで予約も」

そこでハタと気が付く。

これは母親が明らかに、叶の健康について連絡していたということだ。いわば快癒祝いと言うことなのだろう。

宇宙へ！

「約束守ってくれたんだ」

有頂天になりたい気持ちを抑えて、食事に熱中しているセアドにも見せてやった。

「セアドは何回も旅行に行ってるからなー。あんまり羨ましくないだろう」

「そんなことないさ。これからガンガン遠慮なく行けるんだぜ？」

そのうち一緒に行けたらいいよな」

「そうだよな、堂々で行けるんだ」

何とも感慨深い。

半ば羨ましく少年達の様子をみていたナラネの目の前に、ロボットがティーセットを順に置き始めた。熱湯の中で茶色の物体が元氣よく上下運動をして踊る。

「ナラネさん、ホントに食事はよろしい？　なんでしたら今からでも作りますけれど……でも、お帰りになったばかりで奥様にも会ってらっしゃらないんですものね」

「お気遣いは無用です奥さん。ゆっくりと休暇を取らせてもらいましたから、まずは病院行ってですね……」

「あら、病院」

「ええ、そうです。ワクチンを打ちに」

「まだ安定してないの？」

「それが、かれこれ五、六回は打っているんですけど、根つきが悪いと言いか、効かない体質なんでしょうか」

叶がその会話に割り込む。

「ナラネさん、ダメだったんですか。僕は最近打ってもらってだいぶ落ち着いたんですが、ナラネさんみたいに回数増えるところまるなあ……」

「大丈夫だと思ったら再発を繰り返すんで、検査入院兼ねて帰ってきましたんですよ」

母がそれに疑問を呈する。

「ワクチンでしたら各星に病院ありますし、病院が無ければ事業として独占している軍の基地に、駆け込んでも良かったのではありません？」

「それも考えたんですが、どうせなら本拠地のあるヤノに戻って、原因を突き止めたらいいかと思ひましてね」

「そうですか……すると長丁場になりそうな」

「それを覚悟で、わがままさせてもらいました」

「叶は今回で終わればいいね」

溜息をついた母は、大事に育てた少年を愛おしそうに見つめ、逃れられない運命を嘆きそうに眉をしかめる。

「そういうのって再発するかどうか、はつきり調べられないんですか？」

「さあ……遺伝子構造を調べてあるし、大量のデータは集積されるはずなんですが、判明したって話は聞いたことないです。それだったら自分も既に完治していると思いますが」

まったくもって奇病である。

怠慢により放置されてきたのだろうか？

それとも本当に解明できないのか？

「伸び伸びと生きてみたいものよね」

影のようにつつき、或いは追いかけてくる病は実に厄介である。
よほど死を背負っていくより重荷が倍増しているといったところか。

懐かしい話が母とナラネのあいだに花咲くので、叶も一生懸命に薄れがちな記憶を思い出しながら、時々参加を試みていた。

ナラネが勤めているウォーター・ファームの話は、父親から聞くよりも別の視点が面白い。

アッペリウ星系は、住人が疾患持ちが殆どと言うところから、食材に非常に気を使うために発展した農業で経済をなしている。

その一大産業を担っている会社の一つが『ウォーター・ファーム・カンパニー』であった。

「大々的に流通に乗せるといっても、ワクチン無しじゃ生きていけないヤノ人じゃ、あまり遠くに出たがらないものねえ」

「ほかの星系からさらに雇うことにしています。その話を詰めるとか何とか」

「貨物船の建造も必要になるのかしら？」

「ヤノでも充分に建造能力ありますが、リースしたほうが早いと言うことで」

「自社物件はあっても悪くないわ。どちらにせよ新たな融資の話も待ったなしね」

詳しいことは分からなくても、父親が事業拡大に向けて大きな仕事をしている様子が窺える。

他の星の話も色々聞きたいが、ナラネ本人はアッペリウから出たことが無いらしく、あまりネタは出てこなかった。

（他の星系かあ……一番近くて五光年くらいだったかな……）
淡い冒険心が湧き上がってくる。

此処を飛び立って、真上からアッペリウと、それを回る惑星達を俯瞰できたら楽しいのに！

「——別に事業を立てるのなら、本社は何処になさるの？」

「さてー、どこになるんですかね……ヘタするとメディアの方が情

報持ってたりしてますから……輸出事業となれば、やはり現地が一番良いでしょうから、本社に近い機能は持つんじゃないですか？

ただ、『ヤノ』の名前は冠するとか言ってますからね」

「それはただの『ヤノ』？」

「と言いますと」

「ええ、だって此処は一応の正式名称が『β ヤノ』じゃない？

一番を目指すなら『β』は避けたいわねーって、験担ぎ」

「あ、それですか、それについては何とも……社名からして揉めてるって話まで出てますから」

食事を終えてカーペットの上、セアドの隣で寝転んでいた叶が質問を投げる。

「『β ヤノ』って？ この星の正式名称なんてあったの？ 学術名称じゃなくて？」

二杯目のお茶を飲み干したナラネが答えた。

「あんまり使わないですよ。殆どの人は忘れてるんじゃないかなあ、学校でも習わないだろうし」

そして、そろそろ帰ろうと思いますと、母に帰宅の意思を伝える。

「あら、ごめんなさい。つつい長話になってしまっ……」

彼女のお喋りに掴まってしまったも同然である。

再度ねぎらいの言葉をかけてから、玄関に行くため席を離れる。

叶はダイニングを出るナラネを、カーペットの上に立って手を振った。

それから、

「……セアド」

「なに？」

「聞いたか？」

「ん？」

「『β ヤノ』って言うんだってさ」

「だからなに」

ゴッソとゲンコツでセアドの頭を小突くと、自分の部屋に入る。

「いてーな、ワケわかんねえよ」
ぼやきながらセアドも入ってきた。

デジレとジヨットが書いた報告書を読んだから来いと言われて、
基地司令のいる部屋を訪れたダニロバは、半ば覚悟を決めてドアの
外に立っていた。

両側にスライドした扉は、口を開けてダニロバ大尉を吸い込もう
と待ち受ける。

一歩踏み入れて、足元の数段ある段差を上へと視線を昇らせた。
そこには基地司令たるモーレル准将が気配を消すように外を見て
いる。

「ダニロバ大尉であります」

彼はダニロバよりも背が低くて痩せていた。

薄く禿げかかった髪に、油断のならない目つきを怠らない。

だからと言って小物、と言う人物でもない。

「読んだよ」

小男が短く感想を述べる。

あまり好ましくない上官ではあるが、反りが合わないからと言っ
て仕事をしないわけにもいかない。

「……裁定は下りるのでしょうか」

「――」

モーレルの無言に、ダニロバは掌に汗が滲み出るのを感じた。
口を開くのを待つしかない。

モーレルが腕を組んで暫くの後、

「原因が不明だとな」

と、不快感を隠さずに言った。

「……と、申しますと」

「この報告書では不十分だと言っている」

「ですが」

「私がここに赴任してから大した時間は経っていないが、君らは私を素人だと言いたいのかね」

「いえ、それは」

「この基地、そう、この『スタウト基地』の重要性は、一般の将兵でさえ明確に認識できるほどだ。それだけ最重要事項であると理解している。それがこの内容では、今後の調査で何年かかっても参考にすらならない」

「……」

今にも目の前で報告書のシートを燃やしかねない語気である。

「“記憶が無い”と言ってデジレの仮説であるのは使い物になるのか？ あの女がこの基地を二度も脱走したというのに、大人しく居座っている理由が思いつかん。本人が居るのに本人から話を聞いていないではないか」

確かにそうである。

この騒動の元凶であるキアラに、「何をした」と聞けばそれで済むものだろうが、この程度の調査すら出来ないことは何故なのか。

「彼女には」

一呼吸置いて、

「“答えを聞いてはいけない”、からです」

いとも簡単に、ダニロバはモーレルの疑問に答える。

「なに？」

「正確には、聞けないのです」

「そこまで神聖不可侵だというのか？ —— いや、確かに肉体的拷問を加えることは禁じられている。何かしら薬剤の投与も出来ないのは知っている。なにしろ彼女は『自然』^{ナチュラル}だからな！」

自分で言いながらイライラしたのだろう、デスク上のデカンタからコップに注いだ水をあおる。

ゴクリと鳴る喉の音がダニロバにも聞こえた。

「うっかりあの女を分解してしまったら、我々の生命が大変なことになるのも知っているぞ」

「仰るとおりに、神聖不可侵の扱いです」

「当然だ！」

喉は冷えたが頭は冷えなかったらしい。

「なぜ本人の口から、直接聞き出せないのだ？」

「お言葉ですが、それが出来ていたら、このような内容にはなっていません」

用心深くモーレルの表情を窺いながら述べた。

「何故なら、“彼女の記憶も無い”からです」素早く言ってから続ける。「記憶喪失ならば、薬剤を使うなり催眠で探るなり方法があります、しかし神聖不可侵ならやってはいけないことです」

絶望的なほど手段の無さにモーレルの小さい目が見開く。

「……よからう。記憶喪失だとな。それは自己申告でしかない事は考えないのか？」

「信じるしかありません」

「信用だと？」

「はい。問題が起きても彼女に直接関わらないのが不文律化しています。慣例です」

「では、またあの女が、基地を脱走する可能性もあると考えるのか？」

「考えてはおりません」

「そうなたらどうするのだ」

「探すしかありません」

「矛盾しているぞ」

畳み掛けるように重ねてきた言葉には、ダニロバも断固とした意思で応えねばならなかった。

「何が起きても——彼女が居なければ、我々は生きてはいけないのです」

恐らく、誰も逆らえない一言であつた。

少しのあいだ、モーレルは沈黙した。いや、もしかしたら絶句の
ほうがニュアンスが近いかもしれない。

それから、ダニロバから視線を外して報告書^{シート}を見下ろす。

「いいだろう。ここまで聞いたし、事情も理解しているつもりだ。
しかし本部が真実を欲しがっていると、非正規の要請が来ている。
私ではどこまで底いきれるか分からん。……触れてはならないもの
に、触れたがつている輩がおるのを忘れるな」

不穏な空気が彼の背後に漂っているのである。

「下がっていい」

この時間だけで少し距離が埋まったような上官に、ダニロバは敬
礼すると頭を下げた退出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2397i/>

女王の惑星（ほし）

2011年10月9日03時11分発行